



教職大学院 Newsletter

No. 168

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.4.7(公開版)

福井大学連合教職大学院の教師教育改革

～これまで、そして、これからのチャレンジ～

福井大学連合教職大学院 淵本 幸嗣

平成 19 年に、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻の開設にともない福井県教育委員会との交流人事で採用され、実務家教員として教師教育に関わった。教職大学院は、新しいシステムにふさわしく、学校拠点方式で学習者主体の実践コミュニティづくりに取り組み、教職専門性開発コースとスクーラーリーダー養成コースの総定員 30 名でスタートした。当時は、教員の免許更新制度が始まることもあって、教師教育の激動期であった。教職大学院は、新しい教師教育の展望を拓くミッションのもとに免許更新講習にも関与せざるを得ず、福井県教育研究所と連携しながら必修講習を引き受けた。振り返ってみると、学校拠点方式で学校に出向いて協働探究を始めていたので、多忙を極めていたが、そんな中での楽しみは、学校と大学をつなぐ車中でのスタッフとのやり取りだった。子ども中心の学びを重視した見取りや探究的な学び等について、また授業づくりや研究体制について大いに語り合った。研究会だけではない車の中での時間が、同僚性を育んでくれたように思う。

その後、私は福井県の教育委員会に戻り、学校と行政を行き来しながら、平成 31 年に再びご縁をいただいて、教職大学院で仕事をするようになった。2 回目の勤務ということで、少しのんびりできるかと思っていたら、教職大学院は大改革の真っただ中

で、松木教授や柳沢教授から伝えられた当面する課題の多さに、若干戸惑いを覚えた。それらは、以下のように困難なものばかりだった。

- ・県のマネジメント研修とリンクして、修了生に教職大学院の 1 年履修を認めるシステムを創る。
- ・新設していた学校改革マネジメントコースを含む各コースの定員を総数 60 名に増やす。
- ・奈良女子大学と岐阜聖徳学園大学との連合に加えて、既存の教科の大学院も教職大学院に統合して院生を受け入れる。
- ・福井県教育委員会との協働により、免許更新講習を県の悉皆研修である中堅教諭等資質向上研修として位置付ける。
- ・福井県教育総合研究所の先端教育の協働研究員として、教育研究所の FD、新任教頭研修、マネジメント研修の企画・評価に参画する。
- ・エジプトの教員研修をロングスパンで受け入れる。

内容

- | | |
|----------------------|------|
| 巻頭言 | (1) |
| ミドルリーダー/マネジメントコースだより | (4) |
| ラウンドテーブル報告/感想 | (12) |
| 長期実践報告会感想 | (27) |

あれから5年の月日が流れ、福井大学連合教職大学院は、これらの課題に対して、確かな成果を上げることができたように思う。何故、それが可能であったかという点、平成19年から始まる発足期の共有ビジョンは、子ども中心の学習観への転換とそれを支える教師教育の高度化であり、そのことに関しては、全くブレがなかったからである。教師教育の更なる向上を目指す教育改革の渦の中であって、教職大学院の果たす役割は一層重くなったものの、目指す実践コミュニティの姿に変わりはない。免許更新講習、マネジメント研修、エジプト教員研修、独立行政法人教職員支援機構(NITS)との教員研修のコラボというように、数多くのプロジェクトに取り組むことになったが、お互いの実践を尊重して事例をもとに語り合い聴き合う協働探究を進め、長期にわたる専門職の思考や判断について学び合い記録するスタイルは、何も変わっていない。プロジェクトの濃度と運営の角度はかなりハードになったが、数多くの修羅場を経験したスタッフのファシリテーターやコーディネーターとしての力量に支えられて、組織は拡充し、そのコミュニティの中で、専門職のメンバーは実践を重ねるごとに成長し、鍛えられていったように思う。

そのことについて何をもって評価するのか、検証すべきエビデンスは何なのか、というようなことが、これまで幾度となく問われてきた。日本だけでなく世界の教師教育とも協働して実践的な事例研究を重ねてきたのだから、評価についてもそろそろ答えを出す時期になっているように思う。具体的には、長期実践報告という形で修了生が残した良質の実践記録や海外の研修生の実践記録を読み解くことで明らかになるが、この方面の研究成果については、これからに期待したい。

この3年間はコロナ禍で悩まされたが、その時期にアラブ圏の雄であるエジプトと新しい日本型のエジプトジャパンスクール(EJS)の開設に関する教員研修を継続できていることは、大きな自信となった。時にはZoomのオンラインも駆使して、対面と

のバランスの中で充実した教師教育を発展させてきている。毎回、思わぬアクシデントや厳しい課題に直面したが、その都度、研究者と実務家教員との阿吽の呼吸、コラボレーションで乗り切ってきた。それは、常に現場の教員の目線や息づかいをリスペクトして、少しでもより良いものになるよう、柔軟、創意工夫、臨機応変を旨として対応してきたからである。悩みながらも協働して最善の解を求めて現場力を発揮したからこそ、エジプトの教員が満足して研修を終えることができたのであろう。修了生が、日本での学びを生かして、戻ってからも魅力的な実践を展開し、EJSの人氣が高まっているのもうれしい限りである。また、福井から遠く離れた宮古島の先生方が、自律的なラウンドテーブルを開催していることから勇気をいただいている。このような分散型コミュニティによる協働研究も評価されてのフラグシップ大学指定なのではないだろうか。

課題解決のためのアプローチは、いつも「困ったな。どうしようか。」「こうすればいいんじゃない。」「とりあえずやってみよう。」というような感じで、難しく悩ましい問題であっても、世代を超えた仲間との対話の中で何とかこなしてきた。時には失敗もあったが、それも次に生かせる貴重な学びとなっていた。このようなアプローチのやり方、学びのスタイル、課題解決のスタイルは、これからも変わらないであろう。

組織も拡充して、一人のリーダーに任せていれば事足りる状況ではなくなっている。研究者と実務家教員双方の持ち味を互恵的に生かし合う中で、思考のリーダーとコーディネートのリーダーの両面が必要になってきている。研究者と実務家教員の中には、それぞれに特化する人もいるだろうし、その両面を兼ね備えた人もいるだろう。いろいろなタイプがいていい。多様なメンバーがいた方が組織は強くなるので、凸凹は大いに歓迎なのである。教員養成フラグシップ大学の責任を果たすべく、これからも多様なメンバーが週に一回のFDの時間に集い、対話やアイデアを楽しみ、刺激し合いながら自走する元気のいい組織でありたい。辛く困難なこともあ

と思うが、走り続けていくことで福井大学らしい持ち味が醸成されていくだろう。

令和4年12月19日に出された中教審の答申「令和の日本型学校教育」では、「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成についての重要な提言がなされている。それを熟読すればするほど、福井大学連合教職大学院がこれまで大切にしてきた実践し省察するコミュニティづくりを評価する思いが込められているように感じる。これを次なる飛躍の糧として、NITSとも協働し、免許更新講習後の教師教育の在

り方を示すとともに、教職の魅力と重要性についても力強くアピールしていきたい。

今日の大きな教育課題の一つが、教員を希望する若者が減少してきている教職離れで、極めて深刻な状況である。教職大学院は、教員の資質能力の向上を目指すだけでなく、教職がいかに魅力的で素敵な仕事であるかということについても、数多くの実践に基づいて力強いメッセージを発信していく必要がある。これに応えていくことは、教員養成フラグシップ大学としての福井大学の大きな責務であり、総力戦で立ち向かわなければならない。



対話から見えてきたこれまでの自分

ミドルリーダー養成コース1年/奈良女子大学附属幼稚園 辻岡 美希

教職大学院に入ってから、まもなく1年を迎えようとしている。月間カンファレンスや所属園での対話を通して、自分自身について見つめなおしたり実践を捉えなおしたりする機会をもつことができた。

私の中で最も大きな変化だと感じたのは、対話を重ねたことによって、自分自身の思考の傾向をこれまでの自分の背景から捉えることができたことだった。

教職大学院では、対話における省察によって実践を変えることを大切にしているが、初めは対話すること自体にしんどさを感じていた。まず何を問いにして、何を話せばよいのかがわからない。自分が話したことについて「それってどういうこと？」と聞かれることで自分が間違っているのではないかと不安に駆られてしまう。そして他の人が話すことを聞いて、自分自身の考えの浅さに気づいて自己嫌悪に陥ってしまう。そのことで対話に向かうことに抵抗を感じていた。

月間カンファレンスで、修了生の長期実践報告書を読んだり対話をしたりする中で、当事者に質問をすることになった。私はそういう場面でついどうすればいいのか、何が必要なのかといった方法論を問いにしてしまう。そのことを指摘され、方法論ばかりを問うていると、それ以上対話が深まらない、もっと概念的な問いをもつようにと言われた。「概念的な問い」とは何なのか、なぜ方法論を問うことがよくないことなのか、わからないながらも、問いをもつ時には「なぜ」「どういう目的で」を意識するようになった。

そのうち、対話の中で自分が話したことに共感してもらい、「その言葉、よくわかる」と理解してもらえることが出てきて、話すことが楽しくなってきた。問うてもらえることで自分が無意識に感じていたことが言語化されるようになってきた。また相手の意図や目的を尋ねることで、自分の実践にも照らし合わせて考えることができるようになってきた。対話することは、単に顔を合わせて話をするのではなく、他者の話に関心を向け、互いを尊重し、信頼感の中でやり取りをすることで、自らの省察につなげていけるものであると感じ、次第に面白さを感じるようになっていった。

そんな時、なぜ幼稚園教師になったのか、今の自分がある経緯を互いに話し合う機会をもった。自分のこれまでの職場での関係性や役割を考えた時、先輩に言われたことに問いをもたず、それを確実に実行するためにどうすればよいかを考え続けてきたことに気づいた。自分の考えをもつことよりも、自分が求められている場所で求められていることをすることが私の役割だと考えていたのだ。そういった自分の背景が、自分の考えや問いをもたず、方法や効率に注目し、正解とも間違いとも言えない当たり障りのない言葉で話してきた今までの自分の在り方につながっていることに気づいたのである。

自分の思考の傾向を意識し始めたことで、普段の実践について意識して捉えなおそうとするようになった。これまで感覚的・偶発的な判断によって保育を行ってきたが、無意識に行ってきた実践の意味や自分の判断を言語化し見つめなおすことで、自分なりの判断や理論があったことに気づき、自分の保育観

や子どもとの向き合い方、すなわち自分がこれまでの経験値や一般的な発達論を重視して、目の前の子どもが今どういう状況であるかに十分に向き合っていなかったことに気づいたのだった。

私はこれまで「子どもを尊重する」ということが子どもの話したことをそのまま実現することだと考えていたが、目の前の子どもの今と向き合い、自分も一人の仲間として自分の考えをきちんと伝え、子ども達とともに保育を創っていくことであると考えようになった。

実践を省察するということは、単にしたことを振り返るのではなく、自分の在り方そのものを見つめなおすことだと気づいたのは、実践について対話し省察する機会を与えてくれた同僚がいたからだ。そして「省察を通して実践と理論を往還する」というこ

との意味を実感し、面白さを感じられるようになったのは、この1年の教職大学院での学びがあったこそだと言える。

今後私が目指していることは、保護者とともに保育を創り、皆で皆の子どもを支えていくことである。そのために、保護者と対話し、多様性のある社会で生きる子どもの育成について考える機会をもてるようにしたい。私がこれまで感じた対話の面白さ、そして自分が変わっていく面白さを、保護者の方にも感じてほしい。そのきっかけにするために、保護者同士がケアし合い、考えを出し合える場を作っていきたい。ぼんやりと考えていたことについて、少しずつ焦点が合ってきている感覚がある。自分なりの目的をもち、そのために自分ができることを考え続け、学び続けていける自分でありたいと思う。

Over the Past Year and Forward

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立高志中学校

Nathaniel Venezuela Teocson

First and foremost, to this year's graduating students: Congratulations on your outstanding achievement, and thank you very much for your support. The stories you told and the advice you gave, both during our group discussions and through your written publications, invigorated my spirits and often inspired me to take initiative within my own workplace.

It is hard to believe that one year has already passed. Like many Assistant Language Teachers (ALT) across Japan, my undergraduate major was neither in teaching nor education. It was only after several years of working as an ALT that I firmly resolved to pursue a career in education. Despite the apprehension that filled my mind when I began my studies, I have been lucky to receive continuous support from everyone around me; this includes the other teachers at my workplace, my family and friends, and the

numerous colleagues I have been able to meet at the university.

What has become so valuable to me are the collective experiences with the many teachers at the university, regardless of age, amount of teaching experience, subject, and even nationality. Through the monthly conferences, round tables, and the intensive summer and winter sessions, people of varying backgrounds are brought together and given a chance to share their experiences. Leading up to these meetings, I was often nervous and filled with doubt: *Are my own experiences actually worth talking about? Would my group members, who are often fully-fledged and experienced teachers, be interested in my stories?* But not long after our session begins, I become engrossed in my colleagues' stories, and when it gets to my turn, I can see every listening very closely. Before we realize it, we would be told that our time is up; sometimes, we still kept going.

By listening to everyone's stories, I was able to re-evaluate my own teaching methods; by having an opportunity to tell my own stories, I was able to reflect on my role as a teacher. As I studied and learned more about various teaching practices through the discussions and recommended readings, I noticed multiple common traits among those whom I considered great teachers. Their students are the main characters whenever they talk about their teaching experiences, and they consider their students' thoughts and perspectives.

Although there may be times when we end up teaching the same lesson plan to multiple classes, from the students' point of view, it is almost always the first and only experience of it. *Is that activity necessary? Is the level appropriate according to the students' abilities and knowledge? What should (and shouldn't) the teacher be*

doing throughout the lesson?-- these were some questions I did not intently consider during the lesson planning stage in the past.

Collaboration and cooperation were far from being new words within my vocabulary, but it was during this year in which I was able to deeply understand these terms. Broadly speaking, helping others is the main job of a teacher. I realized that this should not only be limited to our students. It is important to help fellow teachers and colleagues.

Among the many changes and developments throughout the year, what remains consistent are my desire to continue and enjoy a lasting career as a teacher, alongside my colleagues and students. There is no predicting how things will go during my second year, but I will just do my best to face whatever challenges come my way.

「教職大学院で学んだ協働と対話」

ミドルリーダー養成コース 2 年/さくら認定こども園 原田 久実

教職大学院に入学してから 2 年。あっという間だったが、この 2 年間は私にとっての人生のターニングポイントであり、特に「協働」「対話」「探究」「子ども理解」について深く学ぶことができた。このように自分自身について振り返りができるのも、教職大学院でのカンファレンスやラウンドテーブル、集中講義で異校種の先生方と対話をして自分の中に落とし込み多様な視点で捉えることができたからだと思う。

2 年前、私は「子どもたちの対話について学びたい」と思い教職大学院に入学した。教職大学院入学と主幹保育教諭（以下主幹と記述する）になったことが同時だった。初めて経験することが、教職大学院にも主幹の仕事にもあり、新鮮で新たな発見もあった反面、悩みや問いはずっと私の心の中にあった。特に主幹 1 年目は、主幹としてのあり方が分からず、頑張ろうと、進もうとしても空回りの日々だった。「空回りのこと

を教職大学院で話してもいいのだろうか。子どもたちとの実践をしていないから語ることもできない。子どもたちとの対話について学びたいと決めていたが主幹だから思うようにいかない。どうしよう」と悩み、主幹保育教諭としてのあり方が掴めず協働することの意義もわからなくて暗中模索だった。だが、主幹 2 年目は 1 年目に比べ少しずつ光が見え、主幹として自分自身の価値を見出すことが出来てきたように思う。それは当園での様々な実践で先生方と目的に向かって対話を重ねた一つ一つが私自身の力になったからだと改めて感じた。視野が広がり、今まではクラスの子どもたちを中心として見て捉えていたことが、今は当園の子どもたちと先生達にも目を向けられるようになり主幹の仕事をやらなければならないではなく、やりたい！と思えるようになってきた。

子どもたちの対話からの気づきとして、私がクラス担任をしていた時は積極的に発言する子の言葉だ

けを拾っていたと思う。主幹になり各クラスにサポートに入ると子どもたちの対話から以前よりも多数の声が聞こえるようになった。対話の中にひとりひとりの子どもたちの思いがあり、それらを丁寧にくみ取りながら子ども理解をして職員で共有することが、子どもたちの対話を支えているのではないだろうか。子ども理解がないと、対話を支えられないと思う。子どもたちの表情や子どもたちの対話から、各クラスの担任の先生と子どもたちの素敵な関わりも見ることができ、0歳児から5歳児までの対話の積み重ねがしっかりとできていることも感じた。各クラスに入り、子ども理解や対話について学ぶことが出来たのも、どのクラスの子どもたちと関わることができる主幹になれたからだだろう。子どもたちの対話を見ていたはずが、少しずつ当園の職員の協働も見え始めた。子どもたちの対話だけでなく、様々な対話の中に互いに支え合う職員同士の協働があるということが実際に先生達と目的に向かって対話を積み重ねていくことでわかった。今後は教職大学院で先生方に対話で支えていただいたように、当園で私も対話で支える側になりたいと思う。

長期実践報告を書いていくことは、私の人生の中でも初めての試みで正直不安であったが、自分自身との対話ができる貴重な経験だった。また、自分だけが書いていくのではなくて、読み手の宮本雄太先生、上田晴之先生に読んでいただき、この実践で私は何を捉え、言いたいのか。この時に思ったことは何？何故この表題にしたのか、等問いを投げかけていただき、先生方からの見解も丁寧に教えてくださり、「私はこれが言いたかったんだ」「何故この事を書こうとしていたのだろう」と省察し捉え直しながら書き進

めていくことができ有意義な時間だったと思う。お忙しい中、温かく関わっていただきありがとうございます。

長期実践報告を書き終えて見えてきたものがある。それは、大木である。靄の中にいたが光が差し、進んでいくと、大木が見えてきた。大木の葉や枝は子どもたちで、幹が協働、根が対話というイメージが浮かんだ。大木の主軸である幹の部分の協働は、私が教職大学院で学び、当園の先生達と実践を積み重ね見えてきた部分であり、私達保育者が協働して未来に向かう子どもたちを支えていきたいという目的も見えてきた。そして根の部分は、対話であり、捉えたことや感じたこと、問いが生まれ、明日への展望もみえる様々な対話から得たことが栄養となり、協働の幹へとつながっている。私は、最初「対話」と「協働」が別々の木で、それぞれが確立して立っていると思った。でも別々ではない、一本の大きな木であることに長期を書きながら気づいた。対話がないと、協働することができない。「今から協働しましょう」といっても、すぐに協働は成り立たないと思う。同じ目的に向かって、協力をして共に働くために必ず対話がある。試行錯誤を繰り返しながら探究していくことが、協働であり、そのことを実践を通して学ぶことが出来た。「協働」と「対話」で未来に向かう子どもたちを支える。いや、未来へ子どもたちと共に支え合い共に学んでいきたい。ひとりの笑顔がみんなの笑顔になるように。

最後になりましたがこれまで私の学びに寄り添い支えてくださった、教職大学院の先生方、院生の先生方に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

諦念の一年

学校改革マネジメントコース1年/練馬区立開進第二中学校 中野 麻委

今年の2月のラウンドテーブルで、自分の実践を語るにあたり、一年間で学んだこととその都度自分

が何を考え、またどのような取組を行ってきたかをゆっくり振り返る機会があった。

今年度は勤務校で大きな服務事故が起こってしまったこともあり、ただでさえ副校長として仕事量が多いところに、本来やらなくてもよいはずの仕事が次々と降りかかり、毎日のように関係諸機関と連絡をとりつつ、同時進行で生徒や教員のメンタルケアに奔走し、膨大な記録をとり続けるという日々を過ごしていた。一番しんどかったのは、学校が一日も早く通常営業に戻るように、また、先生たちの動揺を少しでも和らげるために、「全然、大したことはない」という表情、雰囲気醸し続けることだったかもしれない。副校長という立場上、そのストレスを共有したりや服務事故に伴う事務仕事を誰かに分担するわけにもいかず、孤独とか辛いとはまた異なった、「副校長は一人である」という諦念の心境に至ったりもした。(なので、その期間にあったカンファレンスでは私は見事に「抜け殻」である。一緒にグループになった先生方には今さらながら申し訳ないと思う。)

そのような状況だったので、今年一年間は「自分の学び」は二の次で「私、服務事故対応、頑張った」の一言に尽きるな、いやいや、今回の経験から学んだことはかなり貴重でとても大きいぞ、もうそれでいいじゃないか、とさえも思っていた。

それゆえ、2月に自分の教職大学院での学びを振り返らなければいけなくなった時、正直なところ気が重かった。特に何もやっていないという自覚があったし、そもそも服務事故以前の記憶がほぼ思い出せなかったからである。しかし、渋々ながらも自分のノートや提出したレポートを見返してみたところ、意外にも、カンファレンスやラウンドテーブルが行われるたび、その都度何かしらを考え、行動に移していたことが見えてきた。そこからは、成功も失敗も含め一連のストーリーが見て取れ、企画倒れに終わったしまったものも含め、そういえば当時はそんなことを考えていたなとワクワクした気持ちを思い出すこともできた。また、先ほど「1年の思い出は服務事故対応しか…」とぼやいたが、実際に服務事故の渦中にいたのは2か月程度で(その後の後始末はまだ細々と続いてはいるが)意外に短い期間だったと客観視することができた。記録を残すことの大切さや実践

を書き記すことの意義が今回の一件で奇しくも実感を伴って理解できたような気がする。

さて、肝心の実践であるが、一言で言ってしまうと「昨年度の若手教員育成の取組をブラッシュアップして引き続き行っていこうとしたものの、新しくなった上司から「働き方改革」を理由にストップがかかり、それでも説得して、なんとか妥協案を引き出すものの、新しい方法が上手くいかず、そもそも時間を生み出すためにはどうしたらよいのかというところに自分の視点が変わって行き、副校長32名を巻き込んで何とかしようとするものの、残念ながら限界が見えてくる」といったものである。「時は金なり」ということわざがあるが、実際のところ、時は金よりも得難いものなのではないかという結論に今のところ至っている。自分が行ってきたものなのに、振り返ってみるとその試行錯誤っぷりが他人事のようで面白い。この人頑張っているなと感心さえしてしまう。

また、一連の実践の着地点として、どのようにまとめたらいいか悩んだ時期もあった。教員のように授業をする立場ではないので「授業を磨いた結果、このような生徒の変容がありました」というような結論にはならず、また、校長ではないので「このような校務改善を全職員で行ったので、組織力がこのように向上しました」と言い切ることもできない。学校経営に携わっていながら最終決定権のない副校長という立場は、自分のやりたいことが思うようにできないという点で不自由さやはがゆさを感じることもある。しかし、発想を転換して、全責任を負う立場ではないことを考えると、校長よりも副校長の方が自由な発想で物事を考えることができるのかもしれないと気付いてから、試行錯誤の実践の結果が、オープンエンドになってもよいのではないかと思えるようになった。これも諦念の一つである。

次年度、実践してみたいと考えている取組は、実は全く別の内容である。せっかくなので今まで教職大学院で学んだことを全部詰め込んでみたいと欲張りなプランを練っている。私の中では今年度の実践からストーリーはつながっているのだが、それを語るのはまたの機会に。

「やってみた」からこそ分かったこと

学校改革マネジメントコース 1 年/岐阜市立徹明さくら小学校 宮谷 郁江

教職大学院で学び始めて 1 年が経とうとしています。「若手の先生たちと、授業をよりよくするために話したい。けれど、人間関係やコロナ禍、働き方改革があつて、なかなかできません。どうしたらよいか分かりません」1 年前、そんな弱気な言葉を校長室で、校長先生に話していたことを思い出します。

この 1 年間、年齢や様々な立場や学校の枠を超えた人たち、研究主任という同じ立場の人たちと出会い、自分の実践を語ったり、実践を聞いたりしてきました。自分の実践や思いを言葉にすることは、私がこれまで大切にしてきたことや、これからどうしていきたいのかということを、私自身が改めて認識し、実践へとつながる原動力となりました。そんななかで、今年度、校長先生や教頭先生の助けを得ながら、研究主任であり中堅である立場から、「若手の会（クレリア会）」を発足しました。金曜日の夕方 30 分間、若手（20 代）の教員に声をかけ、様々な話題について語り合う時間です。「帰りの会では、どんなことをしていますか」「生徒指導に悩んでいます」このような悩みを打ち明けられる場であるとともに、同僚の悩みを聞き合う場でもありました。だから、「自分だけが悩んでいるわけではない」という安心感を得られる場でもありました。

また、研究授業の前には、一緒に授業を考えました。若手 A 教諭が音楽科の授業で全校研究会を行うときには、子供が主体的に学ぶために、導入をどのようにするとよいか、色々なアイデアを出し合いました。若手 B 教諭が社会科の授業で全校研究会を行うときには、子供の思考を出しながら、板書を練り合いました。研究会では、「一緒に考えた仲間」として、応援するような気持ちで授業を参観することができました。また、クレリア会メンバーで模擬授業をした日、この日のクレリア会は、授業に向けて煮詰まり、決めた時間の 30 分を大幅に超えてしまっていたので

すが、そんなとき、「ちょっと、お茶でも飲んで、休憩しましょう」と、飲み物とお菓子を差し入れてくれたのは、ベテラン教諭でした。そんな嬉しい出来事もありました。

先日、同じ学年で組んでいる若手の B 教諭が、「クレリア会は、知識を得るという感覚ではなくて、自分が支えられているっていう感じがする会ですよ」と話してくれました。わずかな変化ですが、そうした前向きな雰囲気を感じることができるようになりました。

教職大学院で学ぶ中で、1 年前、校長室で「やりた いけれど、できない」と言った私は、やりたいことができない原因を自分以外の環境のせいにしていたのではないかと気付きました。人間関係がうまくいっていないのは、「周り」だけではなく、「私自身」もコミュニケーションが不足していたことに気付きました。働き方改革があつても、時間を共にしてくれる若手の先生の「学ぼうとする気持ち」があることに気付きました。私が声を出し、動けば、変化を起こすことだってできるということに気付くことができました。

今は、これからのクレリア会の方向性を考えています。徹明さくら小学校にとって、どんな学びの場が必要なのか、そして、必要とされているのかを考えています。先日の研究推進委員会の中で、ベテラン先生が「若手の授業力を、共に伸ばしたい」と話してくれました。教師として、子供たちに力を付けるために、授業力を向上させていきたいという思いで同じ方向を向いて歩み始めていると感じています。

1 年前は「できない」と決めつけて、憂鬱な気持ちになっていましたが、今は、考えるとワクワクしてきます。自分の気づきを糧に、今後も挑戦していきたいと思っています。

教授/享受者としての学びと育ちをめぐる断章

学校改革マネジメントコース2年/保善高等学校 三保谷 遼

令和5年3月1日、本校から228名の卒業生が巣立った。彼らは中学校の卒業式も、高校の入学式も未経験のまま、高校の卒業式を迎えた。そう、彼らは臨時休校という言葉が世間を騒がせていたあの年に中学校を卒業して、そして保善生になった学年である。彼らの学校生活には様々な制限がかかり、多くの行事も中止になったり規模が縮小されたりしてきた。ある意味では感染症に振りまわされて実に色々なことの起きた3年間であったが、何もない3年間であった、と手厳しく評する同僚もいる。あるいは、彼らと（特に行事や部活で）つながる機会が乏しく、卒業式の「感慨」がいつものそれとは違うものだったと口にする同僚もいた。

では、彼ら（保善生たち）は、この3年間でどうふりかえったか。2人の保善生の書いた卒業文集の一節を検討したい。

まず紹介するのはKくんのものである。彼は高校生活をふりかえった文章に「極上の宝物」というタイトルをつけた。では、「宝物」とは何か。正確には2つの事柄を挙げているのだが、ここでは彼が高校生として過ごした3年のあいだに「（彼の学びが）大学受験のための勉強から自分を形成するための学習」に変化したと述べていることに注目したい。彼は「一人前の大人または人としての人生を歩むための学習をしている」と考えるようになった。そうした変容や気づきを「宝物」と表現している。

次に紹介するのはIくんのものだ。彼ははっきりと「私にとって、高校生活での一番の思い出は学校行事や委員会活動ではなく」と断言したうえで、「授業後や放課後に先生に質問をしに行くこと」や教師と「授業の感想や思ったこと」を話したり、「授業とは関係のない自分の興味のある分野について」喋ったりしたことを「思い出」として挙げる。そして、これらのことが「（彼の）知識体系を広げ、学問の内外の世界の解像度を上げ、さらなる興味や関心を持つ要

因となり、人生を面白いものにする宝」になったと述べている。

彼らに共通するのは、学ぶということが自らの「人生」ととしての「宝」であると述べている点だ。社会情勢に翻弄された高校生活ではあったが、彼らは学ぶということを自分なりに「宝」として価値づけ、これからの「人生」への展望を切り拓くことができた。わずかに2人の言葉だけで論じるのは牽強附会との謗りも免れないだろうが、たとえ学校行事のような非日常のイベントがなくても、やたらと制限の多い日常のなかであっても、ひとりひとは確かに学び、確かに育っている。ついでに言えば、ふたりは決して例外ではないはずだ。多感な青春を過ごした高校生たちに学びや育ちがなかったとは考えにくい。きっとひとりひとりの日常のなかに多様な学びや育ちがあっただろう。彼らが例外であるとすれば、自らの学びや育ちを省察的に叙述したという点においてのみである。

それにもかかわらず、「何もない3年間」という表現に象徴されるような言葉が発せられたのはなぜだろうか。同僚に対する批判を述べたいのではない。しかし、この現実には重く受けとめるべきだ。私たちは日々の彼らの学びと育ちの諸相をどれだけ丁寧にみとることができていたのか。そして、そもそも日常のなかに学びと育ちの場をつくることができていたのか。もちろん非日常における彼らの学びや育ちも大切ではあるが、それと同じように、日常の学びや育ちをみとり、支えることも大切なはずだ。満面の笑みを浮かべながら自分だけの「宝物」を自慢する小さな子どもたちの気持ちを尊重するように、保善生たちひとりひとりの「宝物」を一緒に大切にする。そういうふうに彼らの「人生」に寄り添うことを私たちはどれだけできていたのだろうか。私たちは深く内省する必要がある。いいかえれば、私たち教師には彼らひとりひとりの学びと育ちの物語についての優れた読み

手や聴き手、そして有能な担当編集者のように支える存在になることが求められているのだ。

では、そのような力量を教師たちが身につけるにはどうしたらよいのだろうか。もちろん、お題目を掲げるのは簡単だが、それでことが済むのであれば日本の教育改革はもっとスムーズに進んでいるはずだ。理念が経験や実践と結びつかないかぎり、教師本人にとっての（ほんとうの意味での）理念になるのが難しいということは、今日も日本のどこかの学校で容易に観察できることだろう。頭でわかることと、身体でできることは違う。両者を架橋するような枠組みが必要だ。

そういう意味では、たとえば福井における学びのように、教師たちが様々な学びや育ちの物語の読み手や聴き手としての経験やそれらの物語を吟味する経験、そして時に物語の語り手を支えるような経験、更には自らが物語の語り手や書き手になる経験を繰り返すという営みは極めて有効なものであると考えられる。そのような経験を積むことで、メノマエの子どもたちの学びと育ちの物語に脈絡を見だし、彼／女らの物語をより彩り豊かなものに膨らませる力量を教師たちは得ることができるだろう。

だが、そのような力量をすべての教師たちが形成できるような、いいかえれば教師たちがどっぷりと

学べるような〈ゆとり〉がすべての学校にあるわけではない。多忙感の極まる現実のなかで、困難な状況に陥っている学校もあるだろう。大切なのは、それぞれの学校の実情を踏まえながら、教師の力量形成という理念を、ふだんの経験や実践、そして仕事のなかにいかに編みこむのか、ということではないだろうか。必ずしもフォーマルである必要はない。むしろ学校によってはインフォーマルの方がいいかもしれない。いわば、それぞれの学校の〈いま〉を知悉しつつ、〈未来〉を志向して広い視野から教師の力量形成を支えようとする、複眼的思考のできる教師。それぞれの学校文化の文脈に寄り添いながら、教師の学びと育ちをめぐる物語をみとり、そして、つむぐ教師。そういう存在がそれぞれの学校に求められているのではないだろうか。

もっとも、〈いま〉の私が、そして〈未来〉の私がそのような教師たりうるかについては何とも言いようがない。しかし、少なくともここで披瀝してきたような視座を得られた福井の3年間、そしてKくんやIくんとともに過ごしてきたこの3年間は、私の教師としての「人生」にとって、かけがえのない「宝物」である。そして、そのような「宝物」を託す次の世代の何者かが、〈未来〉のいつの日か私たちの学校に現われることを祈念しつつ、筆を擱く。



ラウンドテーブル報告/感想

2月のラウンドテーブルの各 Zone 及びクロスセッションの参加者からの感想文を掲載しています。

Zone A

自分自身を振り返る ～ZoneAに参加して～

勝山市立成器南幼稚園 篠島 律子

幼児教育は奥が深い。知れば知るほど奥が深く、これだという答えが全くない。幼稚園での教師の姿は、時によって幼児の興味関心の原点となり、そこから幼児の遊びからの学びが広がっていく。環境を通して行う幼児教育、傍にいる教師も環境の一つである。その大人が感動し、大切に思うことやその時発した言葉の心情など、そのまま幼児は影響を受ける。だからこそ教師は、知識や教育観、感性、感覚、価値観、人間性が常に問われていることを忘れず、幅広い視点を持って学び続けて行かなければならないと考え、私はラウンドテーブルに参加し続けている。

本来なら院生になって勉強するのがいいと思うのだが、無料で勉強できる！そして、自分の都合に合わせて参加できるという理由で、細く長くゆるくラウンドテーブルに参加し続けているずるい私もいる。

ラウンドテーブルに参加して毎回感じること・・・それは、参加している先生方の心が穏やかで優しく、私のへんてこりんな発言に対してもちゃんと寄り添って下さる。これがとても心地良い居場所となり、これを求めて私は参加し続けるのだと思う。

私はよく教師間の関係性で悩む。午前中の特別フォーラムでは、「心理的安全性の確保」とあったが、何でも話し合える、良いことも悪いことも全部言い合える関係が互いを成長させるのではないかなと思う。さらにこの心理的安全性が確保されていれば、もっともっと幼児教育について語り合え、園全体の資質

向上につながるのではないかな・・・分かってはいるが、「教師にとっての”主体的・対話的で深い学び”」の「対話的」の言葉が、遠慮して何もできずに空回りする私に突き刺さる。

信州大学教育学部附属松本小学校の片原先生の発表の中にあった写真で、あの写真は片原先生の人としての感性があのシーンを大切だと瞬時に捉え、写真に収め、事例の一部となったのではないかな、Aさんの成長の始めから終わりまで支えているのは片原先生の感性、人としての優しさなのではないかなと感じた。Aさんの心情を感じ取ることができなければ、あの事例のきっかけは見取れなかったと思う。

大野高校定時制の上中先生の発表で「地域にとってのセーフティーネット」とあったが、通っている生徒にとって、自分を理解し認めてもらえる、安心できる場所だからこそ、全員が楽しく登校できるのではないかなと思う。生徒一人一人をどう理解するか・・・これも大野高校の先生方の感性、価値観、人間性が子どもたちの心情をしっかりと捉え、支えているのだと思う。

両校ともに教師同士の対話の中にある信頼関係で支えられていて、一人の生徒だけでなく学校全体を人としての優しさと強さで包み込んでいるように、心が温かくなる発表だと思った。

幼稚園では常に幼児の心情が動く。また、幼児の遊びからの無自覚の学びも、何気ない日常の動きの中

にある。教師はその一瞬を捉え、見取り、様子を見たり言葉がけをしたり、時には手助けをしたりしていく。捉え方を一つ間違えると、幼児の成長は簡単に変わっていく、とても恐ろしい現場なのである。だからこそ、自分自身の感性を磨き続けなければならない。この自問自答を全職員でまっさらな気持ちで語り、学び、学び合えるような園になるよう、小さなところから積み重ねていこう、そう思った今回の振り返りである。

園内だけでなく、年間通して勝山の自然の中でいっぱい遊んで大きくなった成器南幼稚園の子どもたち。「先生、見て！空が天気(晴れ)できれいだよ！！」と、まっすぐな瞳で空を見上げる。子どもたちの心情に気付き、その心を大切にできる、そして子どもたちと一緒に「本当！きれいだね！！」と真っすぐな瞳で空を見上げる教師でありたい。

洞察力と同僚性

長野県上田市立長小学校 若林 史也

寄稿に際し、今一度その場で走り書きしたメモを手に取り眺めていた。5日が経過してもなお、赤字で書き留めたキーワードが発端となって、会場の息遣いが鮮明によりみがえってきた。気が付くと、リアルタイムでは咀嚼しきれなかった言葉同士が共鳴し合い、私は「洞察力」と追記していた。

正直、前日に2人のシンポジストを知り、戸惑った。「長野県と福井県」、「小学校と高校」、「教諭と教頭」、「ヤギとの暮らしと定時制での取組」のどの項目をとっても、共通点として受け取れる要素を感じられなかったからだ。これは、コーディネーターの宮下正史先生に試されていると直感した。

幸いにも、ヤギと暮らす片原先生とは、昨年度までの同僚であり、ヤギに関わるやり甲斐も苦難も共有していた。ヤギのために、子どもたちのために、試行錯誤する片原先生はとにかく熱かった。それ故、目に見える形として表れる行為に一喜一憂している印象が強かったが、今回の発表からは洗練され、研ぎ澄まされた片原先生がいたことに気付かされた。そこには、表面的な部分を含め、目では見えない部分を見抜く力が備わっているように感じた。

上記のように片原先生の事例を切り取ると、上中先生の紹介した事例が途端に結び付きを強めた。特に、「なぜ生徒が髪を染めるか、ピアスを開けるか。

その背景を考えてやれ」との一言は、パッと目に付く外見ではなく、捉えにくい内面に神経を注ぐことを意味していると考えられた。

片原先生と上中先生の事例から浮かび上がる共通点は「洞察力」とであると追記すると同時に、私は自身の教員人生の中で「洞察力」が発揮されていた場面を探っていた。

4年前、小学1年生の子どもたちとともにアサガオを育てていた私は、間引きを当然のこととして捉えていた。しかし、D児は「先生は、僕たちの赤ちゃんを殺す気ですか！」と激昂した。当時の衝撃は今でも忘れられない。動揺を隠せなかった私に、同僚がかけた言葉は「きっと譲れない何かがあったんだよ」であった。直接的ではなくとも、背景を読み解こうとする気持ちになるには十分な一言だった。その後、「蚕がせっかくつくった繭を切って、人間のために物を作るなんて間違っている」と語ったD児に対して、「Dくんは、人間の手によって自然が壊されていくことが許せないんだな」と感じられたのは、間違いなく同僚の一言のおかげだ。

私自身の事例も含めて、あらためて再考してみると、「洞察力」が鍛えられる背景には、他者である同僚との協働性が欠かせないことがみえてくる。また、あらためて Zone A の主旨文を見ると、「21 世紀型

の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」ことをテーマとして、「教師協働の在り方」や「学校の当たり前を問い直す」ことが記されている。

今回、私は表題にある2つのメッセージを受け取ることができた。しかし、これはあくまでも私の教育観が前提となっている。願わくは、これを肴に語り合い、さらに自己を磨きたい。

Zone B

Zone B 教師教育

敦賀市立中央小学校 教頭 瞿曇 俊雄

私は「教員の資質能力の向上と業務改善」というテーマで長期実践報告を書いたので、ラウンドテーブルは ZoneB の「教師教育」を選んだ。山形県天童小、若狭高、下庄小、福大附属義務教育学校のそれぞれの学校における教師の資質向上の取組を聞くことができた。すべて全く異なった取組であるが、どれも教師の資質能力の向上に資するたいへんすばらしい取組であると感じた。

天童小は、子どもが子どもに授業を行うスタイルをとることで、主体的、対話的で深い学びを作り上げる。それを成立させるために教師も他の教師と学び合いをする。若狭高校は、互見授業と称し教師同士が授業を見合い、力量を高める活動を取り入れたり、所属中心ではなく学年中心の職員室配置にして、教師集団のまとまりをつくったりしている。下庄小は学校全体で、授業を子ども同士のフリートークで進められるような学級づくりをめざし、教師の学級づくりの資質能力を高めることに取り組んでいる。福大附属義務教育学校は、研究会の数を増やしたり、報告書を書いたりすることで教師の資質能力の向上に取り組んでいる。それぞれの取組に対してどのような成果が得られたのかという検証も行われており、有効性も証明されている。

ラウンドテーブルに参加したからこそ聞くことができた話であり、是非現任校に取り入れてみたいと感じる。現任校をイメージしながら深く考えてみる。「さあ、本日からこの取組を実施するのでご協力を

お願いします」と職員会議で提案をする。一体、何人の職員が同意してくれるだろう。絶対に半数にも達しないであろう。そう考えると、本当にこのラウンドテーブルで発表された内容は真実なのだろうか、もし真実だとしたら、どのようにしてなし得たのだろうかということがすごく気になった。おそらく、発表されたような取組が確実に定着するまでには多くの苦労があったのだろうと思う。しかし、その苦労というのは、「子どもに力が付いた」「教員の資質能力が向上した」という事実を実感することによって報われるのだろう。だから、持続可能なものとして長期的に残っていくのだろうと思う。

教師教育（教員の資質能力を向上させるための取組）と業務改善は、相容れないものであるということに基づき、私は長期実践報告を書いた。上記の取組はどれをとっても、おそらく、業務改善の面で考えると、すぐに職員全員に受け入れられるものではない。しかし、教員の資質能力の向上に欠かせないものであることも間違いない。

午前中、小畑康生氏（文部科学省）の「中教審答申後の教師教育政策の動向」において、管理職のリーダーシップのもと、働きやすい職場環境（心理的安全の保証）を作り上げていく必要がある、という話があった。以前は、何事も上意下達で、職員は校長の指示のもと、命令される取組は意味も深く理解しないまま行っていることが多くあった。取組後の成果を実感したとき初めて取組の意味を知り、上の指示に従っ

ていれば大丈夫だろうという、主体性が育たない環境であった。しかし、現在、それは通用するものではなく、また、肝心の教師の資質能力を低下させることに結びつくものである。

子どもに力を付けたり、教員の資質能力を向上させたりする素晴らしい取組は、本日紹介していただいたもの以外にも探せばたくさんあるはずである。それを、働きやすい職場環境の中で、どのようにして

職員に浸透させ、自ら学ぶ意欲を持たせていくかということが大切である。このラウンドテーブルでは、その話についてもっとお聞きしたかったが、残念ながら時間がなかったため質問できなかった。

「人と意見を交わすことは資質能力の向上に結びつく。」これは、ラウンドテーブルでも、教職大学院でも学んだ間違いのない事実である。

探究する先生方へ感謝を伝えたい

TSURUGA BOOKS&COMMONS ちえなみき 副店長

依田 賢一

今回実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions ラウンドテーブル zone B へ参加させていただきました。タイトルにもある通り先生方へ感謝をお伝えしたいのです。

はじめにちえなみきについての紹介をさせていただきます。2022 年 9 月に敦賀駅西地区にオープンいたしました知育啓発施設です。店内には 3 万冊を超える書籍が並び自由に閲覧することが出来ます。また、カフェスペースを含めた憩いの場であり観光拠点としての役割を担う場所です。ここは「学びたい人を増やすこと」「学び続けたいという人を増やすこと」「人と人をつなぐコミュニティを生み出すこと」この 3 つを目標に敦賀で生活していくことが楽しいと思っています。ただけのよう日々運営を行っております。来店者数も 10 万人を突破し、多くの方に足を運んでいただきました。誠にありがとうございます。

さて、今回のラウンドテーブル zone B では教師教育：学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成 - 教師の力量を高める校内研修の在り方 -、というテーマで登壇者の方たちの校内での取り組みについて伺うことが出来ました。また、お話の後には参加者同士で内容の振り返りと感想をシェアする機会をいただきました。どちらの内容も教員では

ない私からすると知らないことばかりで大変勉強になりました。

お話を伺いながら気付いたことがありました。それは子どもたちの探究する力を育むために、先生方が探究をされているという、当たり前の事実を認識できていなかったことです。私個人の考えですが、探究するとは、ある事柄に対し模索し行動するという行為だと考えております。子どもたちの探究活動に正解などなく、うまくいかないことがあったとしてもそれを否定したり責めたりすることはないのだろうと思います。成功するまであきらめなければ失敗ではないという考え方がありますが、先生方の探究において、「今回はうまくいかなかった。でも、あきらめていないから失敗ではない。」と簡単に言えないのではないかと。失敗できない中での探究活動とは計り知れない苦労があるのではないかと思います。教育を行うということの困難さと大切さを知りました。大変失礼を承知ですが、この場を借りて先生方に感謝を伝えさせてください。皆さんは子どもたちが、ヒトが、豊かに暮らしていくための根幹を担い、働いてくださっている。本当にありがとうございます。

子どもを育てるということの関係人口は多様である方が良いと考えています。家族、学校以外の場所や

人の協力があることで、より個別具体的な教育を行うことが出来るのではないかと思います。学校がどうしても苦手な子どもたちもいると思います。そんな時は是非、ちえなみきに来てほしいと考えています。一人で居られる場所として、逃げ場所として、知らない人と出会うきっかけとして利用してもらえたらうれしいです。これは子どもだけではなく大人の

方も含めてです。今回「学び」や「成長」の大前提として攻撃されることや否定されることに恐れることなく過ごせる安全地帯を作っていくことがコミュニティを作っていく上で大切なことであると改めて学ばせていただくことが出来ました。ありがとうございました。

「自走するコミュニティ」～対話と協働とユルイ巻き込み力

敦賀市立沓見小学校 教諭 夢田 昌代

「ねえねえ、さっきの国語の授業で、私と A さん、同じ題名をつけたよねえ。なんで？授業中に聞けなかったから、理由を教えてほしいんだけど。」私が 4 年生を担当していた時の「一つの花」の国語の授業直後のある 2 人の子どもの会話である。この授業は、単元の学習のまとめとして、自分だったらどんな題名をつけるのか考え、交流し合った授業だった。

なぜ私がこの授業後のことを思い出しているのか。それはこのことが「自走」するきっかけではないのか、と考えたから。授業の中だけではなく、その後も対話したい、学びを深めたいという思いを持つことが「自走」のスタートではないか、と思ったから。

なぜ私が「自走」ということについて考えたのか。それは、「自走できる子どもたち」「自走できる教員集団」「自走できる組織づくりのきっかけ」などについて語った直後だから。

私が参加した Zone B 教師教育のテーマは、「学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成 - 教師の力量を高める校内研究の在り方 -」だ。与えられた研修ではなく、自発的意志をもって取り組む研修の在り方や組織づくりについて学び合った。その中でキーワードとなったのが「自走」だった。

今年度、冒頭の国語の授業の再現か！？教員版だ！と思うシーンに何度も出会った。沓見小では 4 月から「ちょっとやってみない会」という自主研修会を

立ち上げた。研究テーマである ICT の研修を主として、毎週火曜日の放課後 30 分程度実施した。参加は自由。行きたい時に、行ける時に行くシステム。はじめは全員参加ではなかったが、今では全員参加のもと実施できている。この「ちょっとやってみない会」を終えて職員室へもどってきた先生たち、なかなかタブレットを閉じないのだ。

タブレットを閉じない。「さっきの操作、もう一回教えて」とか「こんな使い方もあるんじゃない？」とか、「ちょっとやってみない会」が終わってもまだ盛り上がっている。「あー、なるほどね」とか「それ、いいかも！」とか言い合って、明日につながっている感じがする。全然「ちょっと」やってみるという感じではない。「がっつりやってる」という様子だ。この姿こそが「自走」の出発点なのではないだろうか。

そのきっかけづくりをすることが私たちの仕事だと思う。そのきっかけは、「ねばならない」型ではなく、「ユル」型であること。参加してみたら得しちゃった、次も参加してみよう！と思えるような。また、「昨日の、ちょっとやってみない会で、こんなことができるようになったんだ」が広まって、私もできるようになりたいな！と、思ってもらえるように。インフォーマルラーニングの中にこそ、主体的学習を支える意欲や動機づけがある。

「書いてよかった！話してよかった！」今、2日間のラウンドテーブルを終え、思っていること。このことは、あえて言語化する必要はない。カンファレンスも、ラウンドテーブルのクロスセッションも何度も経験している。その度に感じていることだ。でも、やっぱり書き記しておきたい。「書くことで話したくなる。話すことで書きたくなる。」対話の不思議な力を実感している。このサイクルが今回のクロスセッ

ションにもあった。特にラウンドテーブルでは、異業種の方との出会いがあり、実践発表を通して関わりを広げることができる。今回もそうだった。

これからも、対話と協働、そしてユルイ巻き込み方で、「自走する」学校組織づくりを推進していきたい。

ラウンドテーブルに参加して

教職員支援機構 戦略調整室室長補佐 西川 由起

『「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ』（令和3年11月、中教審「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会）において、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿として、現場の経験を重視した、個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、教師の学びにもまた求められている命題である、と示されました。

このことを受け、私たち教職員支援機構では、現在、「新たな教師の学びの姿」を実現する「新たな教職員研修」の開発に向けて、準備を重ねています。

私は、現在、いわゆる出向という形で教職員支援機構に勤務をしていますが、元々は地方自治体の教育委員会の職員です。機構において「新たな教職員研修」の検討を進める一方で、私自身はこの審議まとめが出されたときから、学校・園を支える教育委員会にこそ「主体的・対話的で深い学び」が必要なのではないか、という思いを持っていました。先生たちに「主体的・対話的で深い学び」と言う以前に、自分たちはどうなのか？ということです。

「新たな教職員研修の開発」というミッションと、自分自身の課題意識を持って参加をさせていただいたラウンドテーブルでしたが、2日間をとおして、大変な刺激をいただくとともに、自分自身の考えを深

めることが出来る、とても有意義な時間となりました。

まず、1日目の午前中にはお2人の先生から、午後には、参加したZoneにおいて3人の先生から実践発表をいただきました。

どうしたらこの様な子どもたちが育つのか！と、感動を覚えるほどのご実践でしたが、共通していたのは、その子どもたちの姿を支える、先生方自身の学ぶ力と学び合う教職員集団の姿であったと思います。そして、更に共通していたのは、「子どもたちへの強い思い（実践発表では「熱量」と表現されていました）」と「心理的安全性」「肩肘を張らずに」「ゆるく」「対話による自身の『観』の捉え直し」というキーワードであったと思います。そしてこれは、私自身が、これまで学校現場を見て、感じてきた感覚と一致するものでした。

実践発表後のブレイクアウトセッションでは、実践発表をしていただいた学校の校長先生とご一緒させていただくことができ、発表からは分からなかった、様々なご苦労を知ることが出来たことも、貴重なことでした。実践発表というのは、一方向で成果を中心にご発表いただくことが多いため、キラキラとして見え、その裏のご苦労が分かりにくいからです。大きな成果を挙げられている一方で、継続をしていく

ためのご努力は並々ならないものであると感じました。

また、2日目にも、悩みながらも省察を重ね、実践を重ねておられる先生のお姿を拝見し、やはり、学

校・園を支える教育委員会の職員として、私たち自身が学びを深めなければということ、学び合う職員集団でなくてはならないということ、学校から学ばなければならぬし、学校から学ぶことが出来るということ強く感じています。

Zone C

世代間の相互作用が地域と学校にもたらすものとは

福井県越前市白山小学校 校長 八田 千香

Zone C は、「持続可能なコミュニティをコーディネートする～世代間の相互作用は地域に何をもたらすのか～」というテーマでした。持続可能という点で、本校の Shirayama-SDG s にリンクし、次年度の活動に向けて、参考になるような新しい考え方を吸収できるのではないかと期待をもって参加しました。世代と立場が異なる2人による Session I・II の実践報告を伺いながら、今年度自校で推し進めてきた Shirayama-SDG s について考えていました。

私が勤務する越前市白山小学校は、生活科や総合的な学習の時間には、多くの地域の方々が来校し、コウノトリ米の栽培や生き物調査、さぎ草栽培、みそづくりなど様々な活動をサポートしてくださり、その活動の多様さに着任当初は驚きました。しかし、同時にこれらの活動を子ども達にとって意義のある活動にする方策を考えるようになりました。そこで、これまでの活動を整理し、新しい学びとしてブランディングしたものが Shirayama-SDG s です。予測不能な未来を生き抜かなければならない子ども達が、地域の方々のサポートの元、Shirayama-SDG s の学びでどのような力を得ることができるか、そして、その力こそが、VUCA時代を生き抜く子ども達の根幹を支える力になるのではないかと考えました。私がこだわったことは、

- 1 経験を受け入れるだけでなく、批評的・批判的・共感的など、様々な視点での課題をもつこと

- 2 他教科での様々な学びを確実に活かすこと
- 3 発達段階に応じた方法で探究し、探究の過程で新たな課題をもち、さらに探究を進めること
- 4 社会に繋がる方々に子供達の提案を聞いていただき、そのレスポンスを次の学習に活かすこと

この4点でした。今回の Zone C のテーマにもある「世代間の相互作用」は、まさしくこの4番目にあたります。私は、日頃から地域との関わりは一方的であってはならないと考えています。相互に作用するべきと捉え、今年度は、探究学習発表会を地域の方々に向けて開催しました。公民館長や自治振興会の会長、地域コーディネーター、家庭地域学校協議会メンバーの方々など30名以上の地域の方々をお招きしましたが、タブレットを操りながら、堂々と探究学習の成果をプレゼンする子ども達に、参加者から様々な感想や意見をいただきました。子ども達の提案や企画が、地域の方々、世代の異なる大人に受容され、実現されることこそが、子ども達の自信となり新たなモチベーションを生み出します。全体共有の中で、高校生である半田氏の行動力について話がありましたが、まさしく、世代間の格差を超えて受容され、企画を実現できていることが半田氏の行動力を生み出しているのではないかと考えました。また、田中氏の発表に関する全体共有の場に出てきた「企画者としての中学生」という言葉に共感しました。今回の本校の探究学習発表会でも、企画を地域の方々に理解し、納得し

ていただけるような提案方法を各学年で考えましたが、子ども達からは、自分達の企画を何としても伝えるという強い意志を感じました。

世代間の相互作用とは、世代の異なる者同士が、互いに企画を持ち寄り、意見を交換し、実現につなげていくこと。これを繰り返すことで、持続可能なコミ

ュニティとなりうるのではないかと自分なりの結論を見だし、ラウンドテーブルを終えました。ファシリテーターの富永さんがおっしゃっていたように、全体としての結論づけはなく、立場の異なる者が、それぞれの立場での結論を持ち帰ることができる。それがラウンドテーブルだと感じました。

よりよいコミュニティをつくる世代間交流を促していくために

愛媛大学 高橋 平徳

Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする～世代間の相互交流は地域に何をもたらすのか～」というテーマで、2 件の実践報告をもとに、富永さんの軽妙な全体ファシリテーションによって小グループでの話し合いや、中高生も交えた世代間を超えた全体共有が行なわれた。

実践報告の 1 件目は、まちづくりの高校生プレーヤーとして活躍されている半田智咲さんの報告であった。まちづくりに興味を持ったきっかけ、大学生の中に唯一の高校生として参加したまちづくり班、若者を対象とした福井駅高架下の有効利用のための調査や企画、その企画からの 2 度にわたるストリートパラダイスという実証実験(高校生スタッフ7名に)、アオハルフェス(高校生 20 名以上)、全国産業教育フェアの生徒実行委員としての活動など、高校生の目線からの地域活動と活躍の場の拡大について報告された。プレゼンも非常に上手で、すべてが楽しそうで、毎回調査も踏まえた省察を重ね、学びを得られながら継続されていることに驚きっぱなしで聴かせていただいた。とくに印象に残っているのは、「私はこうやっているんな活動しているんですけど、本当に自分がやりたいって思ってやっていて、そういった高校生ってすごたくさんいるので、そういった子たちがもっともっと羽ばたける場所とか空間とか事業とかあったらすごくいいな」という趣旨の発言であった。実際に彼女のまわりには活動の広がりとともに多くの高校生が集まってきている。「世代間」と

いう視点で考える際しばしば私たちは「若い子たちは地域に興味がない」といった枠組みをつくってしまっているが、決してそのように悲観してしまう必要はないと勇気づけられた。

実践報告の 2 件目は、福井市社北公民館主事の田中典子さんによる報告であった。14 年継続しフोटコンも行われるイルミネーション、中学生が運営するウォークラリー、小学生・幼児・保護者が地域活動に参加するとポイントがもらえるチャオカード、5 色ちはやふるという百人一首かるた大会、市民の演奏会つながるコンサート、中学校と協力した敬老会や特別支援の子たちも参加している花壇整備、はたちの会などの活動が紹介された。こちらも圧倒されながら聴かせていただいた。小学 1 年生の娘を持つ親としてもとても楽しそうな活動が盛りだくさんでぜひ参加させていただきたいと思うものばかりであった。またどれもこれもが長い期間継続されている。そのことで中学生の時に参加したイルミネーションに大人になってフोटコン作品を寄せたり、小学生で参加したかるた大会に中学生でも参加して自発的に会場の片付けを手伝ったり、「私たちの代はコロナで中止になっても仕方ないけれど、後輩には感動のステージをさせてあげたいのでつながるコンサートはやってほしい」と中学生が直接要望を伝えに来てくれたり、敬老会の 1 年目ではなかなかうまく関われなかった中学生が 2 年目には他の生徒にアドバイスしたり招待者に手を差し伸べたり声をかけることが

できたりなど、継続されているからこそ子どもたちの大切なものとなったり、多様な参加・参画が可能となっている活動ばかりであった。

田中さんの「中学生には都合のいいお手伝いではなく、主体的に地域で考えてくれる様子を見ることができるようになりました」という趣旨の発言も強く印象に残っている。この「手伝いではなく企画者」として子ども・若者を信じて任せることの重要性は小グループでも全体共有でも大いに話題になり、会場全体で共有された基本事項となった。

半田さんの報告は、地域への、そしてかわっている大人への肯定的感情に溢れていた。田中さんの

報告も同様に子どもたちへのそれが溢れていた。地域に興味をもってくれている子どもたちにどのようにハードルを下げて第一歩を踏み出し参加してもらうのか、また参加してくれた子どもたちの心理的安全性を高め、のびのびと活動に参画し定着してもらうには大人がどのような関わりをしていけばよいのか。心理的安全性が確保されたさまざまな世代・人びとの参画によってよりよいコミュニティ形成のための交流が促されていくのだと、今回の Zone C に参加し話し合い共有し省察することで改めて強く感じることができた。

Zone D

Daily Reflection For 18 February 2023 Round Table Discussion

Mbunguchi Community Day Secondary School Teacher, Uganda

Bertha Chanya

On this day we had the opportunity to participate in the zone D round table. The round table was well-organized and was very beneficial to all the participants who attended. There were several things that I observed which have made me to say that it was beneficial to us.

Participants from different parts of the world were given an opportunity to interact and learn from one another. During the round table, participants from the 2021 classes were mixed up with participants from the 2022 class. To me, this was a good move because it provided an opportunity for us to learn from the participants we have not interacted with that much. Additionally, when we broke into groups, we were provided with an opportunity to interact with yet other participants that we have never met who were online. This further provided us with other diverse views as well as experiences from these

participants. Listening to other participants experiences provided an opportunity to reflect on the progress that we are making as individuals for the betterment of our implementation.

The round table provided us with an opportunity to learn from two perspectives of implementation. Firstly, we had Mr. Kona from Cambodia who happens to be a secondary school teacher. From his presentation, Mr. Kona has managed to implement lesson study at the school where he teaches. It was very encouraging to hear him talk of how he managed to implement as some people may think that it might not be possible for a teacher to implement lesson study. Then we had Mr. Vwalika who is a lecturer at a teacher training college who also gave us his implementation experience at the college where he lectures. Although some participants in general feel that it is not

easy for a lecturer or a senior person to implement lesson study, Mr. Vwalika demonstrated that it is very possible to implement lesson study in any learning institution. The two unique perspectives of implementation were very vital as they taught me that implementation can be done anywhere as long as there is a will.

I specifically learnt one very important lesson from Mr. Kona's presentation and that is to be sensitive of the environment where one is trying to implement. He indicated that he could not ask his fellow teachers to prepare practice records as he thought it would perhaps discourage them as they were not used to it. He thought of introducing it at a later stage. To me this was a very good reflection and a good response to it was given.

From Mr. Vwalika's presentation, I specifically learnt that with enough interest and determination one can

achieve a lot. It was impressive that while others complain of how they can implement lesson study in higher institutions of learning such as colleges, Mr. Vwalika was very creative as he has managed to link five schools to the college where he lectures and the implementation is taking place in these schools. This to me is a good motivation to all of us who were in attendance.

Finally, I was impressed by Prof Kosaka's question at the very end of the round table about student inquiry, teacher's inquiry, teacher trainer's inquiry and university staff inquiry. To me this question provoked our minds to think of how aspects of lesson study can be linked from the lowest level of education to its highest level. This to me is an indicator that lesson study is paramount at all levels of education to improve the standards of learning.

Participation Report

Kakash Secondary School Home Room Teacher, Cambodia

Chhoem Sosakkona

In the winter roundtable on February 18th, 2023. There were five zones (A, B, C, D, E); and I was in zone D international providing a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan. The Zone consisted of two sessions: "Symposium" and "Roundtable". The symposium is all about Improving the quality of education through lesson study. In the symposium, there were two speakers (I and Mr. Kondwani Daniel Vwalika) given 15 minutes each to share and discuss the purpose approaches, results, and challenges of lesson study in our contexts. My symposium's topic is about "The Importance of Lesson Study in a developing country's Education". I shared my LS implementation experience by explaining why LS is important in education and demonstrating the challenges I encountered and how I dealt with them. The presentation stresses three main

stages in LS conduction in Cambodia. Those are lesson design, open research class and reflective meeting. When and after my presentation, I learnt that participants were interested in the topic as they have things in common. After their impression on my presentation, some participants shared their challenges and experience in their workplace over improving the quality of education. They seemed to learn something helpful from me, and so did I. That was a very good atmosphere to discuss the common purpose. Moreover, I also got beneficial comments from lecturers of university of Fukui. I could reflect on my LS practice through their comments and thoughts.

In the "Roundtable", educators from various countries shared their lesson study practice and learnt from each other in small group discussions. There were three guest speakers from African countries in my group. They shared what they practiced and experienced in LS implementation

process. That's a wonderful time for them to narrate their practices and empirical observation of LS conduction. After each sharing, all speakers were given impressions or/and comments for improvement, and asked questions regarding their topic.

Throughout the roundtable, I greatly realized the priceless importance of the reflective sharing meeting with educators from different places and roles. It was not just a time to listen to their empirical knowledge but also to be welcome for sharing my challenges and practices with the other participants. I felt delighted to see crucial sharing with mutual respect. The roundtable session makes

participants more encouraged and cooperative for the next time. Moreover, by the roundtable I notice that care should be highly taken of lesson study meeting with fellow colleagues or other practitioners. Because it is a very good moment for sharing practice, challenges, and concerns with each other regarding student's learning development and finding viable solutions together. In the roundtable, I could see how practitioners have faced the situation in their school and dealt with that. Every participant has his own difficulty and strategy to curb it. That is why I could gradually be flexible and aware of what I should and should not do with my students in any situation.

Round Table Cross Session Report

Head of Mathematics Department, Matero Girls Secondary School, Zambia

Smit Felix

ROUND TABLE DISCUSSION

Our group was number 6 which had participants one from each of the following countries Cambodia, Zambia, Malawi, Rwanda, Ethiopia, and Mexico. Impressions were shared by participants from Cambodia, Malawi, Ethiopia, Rwanda and me from Zambia respectively. The participant from Mexico was the facilitator in our group. The interactions were very educative and worthy noting. Each participant was given time to make a presentation, sharing impressions, reflections and progress made so far where open lesson study implementation was concerned. I was so delighted by listening to colleagues from other countries especially from Kondwani from Malawi who indicated how the college he comes from had made great progress in open lesson study implementation at Nation, college and the schools attached to the Nalikule College. This made me realize it was possible to make headways as long as the main players or stakeholders like the Ministry of Education are involved.

MY PRESENTATION

I shared the following as concepts picked throughout the program and that I would attempt to implement back in my country starting with my School Matero Girls Secondary School in Lusaka;

I was quick to mention that I had already started implementing the concept of communities of practice (by department, classroom, school level) at my School in the year 2022 after online session starting with the mathematics department. This concept promoted the spirit of oneness and collaboration among members of my department and that everyone in the department had greatly appreciated the idea.

The concept of collaboration: among teachers (in the individual subject, within the school), among learners (within class, across classes), among schools, among University/Colleges and Schools, among communities was key to enrich learner learning. I mentioned that in my department, everyone was now willing to work together in planning as a department, regarding one another as of great importance and that all this was as a result individual

impression sharing that was done by members in the department after reading the community of practice document.

The concept of project- and inquiry-based learning (under STEAM); this concept if adapted to my local school is likely to enhance learner performance during school based assessment that is done as part of learner continuous assessment.

The concept of lesson study (within subject, across subjects, connecting neighboring schools); I indicated that this concept if well implemented in my school would enhance the cultivating of professional teacher development and learning communities.

The concept of reflection (in action and on action), within the subject, in the classroom, at school level if implemented will enhance development of quality teachers for quality learning of the learner since the teacher will have learnt to be a reflective teacher whose focus is on the learner learning needs.

The concept of research at any level of learning (development of strategies). I was quick to mention that, any challenges and problems can only be solved if the teacher and the learner embraced research.

The concept of autonomous learning where learners are in control of the lesson regardless of the subject need to be promoted starting with my classes and then gradually roll it out to other teachers as they observe my successes.

The concept of comfort and sustainability, teaching and learning must bring comfort in the learner and teacher such that both must be free to explore the learning. The strategies and approaches in the education sector need to be sustainable. For example, the use of paper is it sustainable as compared to use of ICT or vice versa.

REACTIONS FROM OTHER PARTICIPANTS

After making my presentation, the other participants were quick to commend me in the approach I had this far

taken of first creating a community of practice in that this would help me in finding no much problems from members at the time of open lesson study implementation. They encouraged me to not only end at Departmental level but scale it down to the entire school.

STEPS OF ACTION TO BE TAKEN NEXT

I intend to continue with community of practice record reading to be given to Heads of Departments in the school to read and come up with their own individual reflections having in mind the question whether as a team of managers we existed as a community. Once we agree to work as a community then with the help of these members, I would ask them to create their departments as communities. Finally, it will be done as the entire school to agree to become a community using the same method of making individual reflections after reading the community of practice document that I got during online sessions in 2022.

SUMMARY

In summary, it was evident from every participant that lesson study was a good concept to cultivate professional teacher development and communities of schools. Collaboration, community of practice, learner autonomy, inquiry and project-based learning, research where highly appreciated concepts by other participants after making my presentation. Learner autonomy is cardinal in the 21st Century in order to have critical thinkers and students who are solutions to emerging problems. Teachers need to make a shift from acting as if they are the only source of knowledge by allowing learners to have control of their own learning. Teachers need to take more time in listening and less time of telling learners for this will reduce learner forgetting rate. The moderators helped us much by coordinating the group discussions and made the atmosphere so rich for us to share ideas without intimidation. It was evident that, learners need to be trained how to be independent thinkers at early ages such as what was observed at Morita Sakura Kindergarten School.

Zone E

福井 RT 2023 Zone E の話題提供と ワークショップを通して感じたこと

東京大学教育学部附属中等教育学校 69 回生(現富山大学都市デザイン学部 3 年)

益田耕佑

実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions Zone E 探究で児童、生徒、学生さんと先生方と交流して「日本の未来は暗くない」と感じました。

上記のように感じた理由の前に私が担当した話題提供内容を紹介します。私は Zone E の「仮想の学校アラカト学園が抱える困り感(事)を解決するアイデアをつくるワークショップ」の事例紹介として、母校東京大学教育学部附属中等教育学校で行われている三者協議会の話題提供をしました。東京大学教育学部附属中等教育学校は東京都中野区にあり新宿駅から 2 キロメートルほどの距離にある共学の中高一貫校です。東京大学教育学部の附属学校で、総合学習や卒業研究など主体的探究的な学習に力を入れています。そんな母校、東大附属は生徒会活動も盛んです。文化祭や体育祭、合唱祭の企画運営と委員会だけでなく、記録や印刷、会計や放送、監査に至るまで生徒会内で組織化して進めています。その中で私たちは三者協議会という行事を年 2、3 回のペースで 20 年以上継続して行っています。この三者協議会は生徒・保護者・教職員の 3 者合同でグループを作り、学校の課題やこれからの形について議論する行事です。3 者が成長し、合意してよりよい学校づくりを実現することを目的に、「認め合い」「高め合い」「協力し合い」を大切に意見交換をしています。過去のテーマとして以下のようなものがありました。「部活動の在り方について」「携帯とネットの利用」「宿泊行事に

ついて」「校内の美化について」「お弁当か購買か」「ルールと意識について」このような議題を通して、これまで 3 者の認識が異なるがためにモヤモヤが生じていたことを少しずつ解決しています。この話題提供を通じて私は「学校に関係する人全員で考える」ことの大切さを、現在進行形で悩みを感じている児童、生徒の皆さんのヒントになればと思いお話ししました。

話題提供だけでも今回の機会は成長につながりましたが、それ以上にワークショップでの気づきが大変大きな学びにつながりました。ワークショップで同じグループになった小学 5 年生、高校 1 年生、高校 2 年生は自ら問いを立て解決策を考える主体的対話をすでに実現していました。日本の教育は例えば学歴・偏差値主義が抜けきらない受験の世界や、テクニカルスキルを重視し、より本質的なモチベーションやスタンス、ポータブルスキルに力を入れきれない公教育の仕組みなど様々な課題を抱えています。そんな中、実際に初等・中等教育を受ける児童・生徒がここまで主体的に行動できることに希望を感じたと同時に、教育に興味を持つ学生としてとてもうれしく感じました。

改めて今回「日本の未来は暗くない」という気づきをいただいた福井 RT とそれに招待していただいた福島先生をはじめ、運営をしてくださった生徒さん、先生方に感謝し感想とさせていただきます。

クロスセッション

ラウンドテーブル・クロスセッションの醍醐味

福井大学教育学部附属幼稚園 副園長 大野 喜美恵

福井ラウンドテーブルの最新で幅広い内容は、とても刺激的で1日目で十分お腹いっぱいになる。2日目も参加したのは10年程前、消化不良に加えて脳みそも沸騰、ふらふらになって帰途についた。以来、1日目は参加しても、2日目に参加する勇気は到底持てなかった。今回参加したのは「メインディッシュが来る前になぜかテーブルを後にしてしまうようなもの」(木村優 No. 167)という喩えに心ひかれたからである。年を経た今なら、その醍醐味を味わえるかもしれない。

当日最初に半原先生が自身の言葉で語られた。「会を回そう、場を調整しようとの思い(企み)は必要ないこと。質問や意見をグッとこらえると報告者からそれをしのぐものが出てくること。短い応答やゴールを目指した話し合いに慣れているが、より高度なところへチャレンジすること。自分の言葉を探りながら長いチャレンジの中で、見えてこなかった光景が見えてくる、それがその方にとって意味ある語りとなる」のつけから釘を刺された気がした。聴くとは能動的な行為であり、限られた時間の中で話し手に反応することをよしとしてきた自分には、なかなか難しい。意気込まず、ゆるやかなコミュニティの一員になれたらいいと思った。

以下、3名の実践から浮かび上がってきた共通点と印象的な語りについて記す。

- 1 自身の固定観念を外し、子どもの思いを知り、それに応える中で子どもは主体性を発揮する。

環境が変わった時、これまでの方法が通用せず、壁にぶちあたる。打開するにはこれまでの考え方に捉われず、目の前の子どもを見て、今必要な支援、求める環境を整えること。子どもはやりたいことなら自ずと主体的になる。

- 2 フラットに接し、子どもと一緒にやって楽しむ中で、共に成長し合うコミュニティが生まれる。

普段から気軽に話せる雰囲気を作り、子どもを信じて待つこと。対話による合意形成で信頼関係を育む。探求は、教師が子どもと一緒に考え、楽しむようになった時、劇的に変わる。

- 3 人との出会いやつながりが新しい世界への扉を開き、自身を成長させる。

気軽に手を挙げた交換留学で東京から来られた園の先生は今や教職大学院生となり、伴侶と出会って福井に永住とのこと。ワクワクする思いで人生を楽しもうとする姿がまぶしく感じられた。

「2年前この場に参加するとは想像もしなかった」冒頭、皆が口にした一言。一期一会、語りの文脈や空気感はその時と場でしか味わえない。異質な他者と出会い、心動く場。既存の知識・情報だけでなくやりとりの中で生み出される価値に気づき、身体に落とし込む。メンバーの素のままに本音で語る清々しさに、自らの省察も促された。身近にこんな場があるといい。明日からは一人一人との対話を大切にしていきたいと思った。今回はクロスセッションを満喫し、何より楽しかった。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

初めてのラウンドテーブルで感じたこと

長野県東信教育事務所 指導主事 山浦 光雄

福井大学ラウンドテーブルに、初めて参加させていただいた。

〈ラウンドテーブルが始まる前の気持ち〉

- ・他県の方、校種や業種が違う方と出会うこと、話すこと、緊張するな。
- ・指導主事という、先生方とはまた違う職種のことを、周りの方にわかってもらえるようにうまく話せるだろうか。
- ・1人あたり100分も時間が割り振られるとのこと。そんなに間が持つのだろうか。

〈ラウンドテーブルを終えて 今の気持ち〉

- ・なんと濃密な約5時間であったことか。お互いに語り合い続けた、あっという間の5時間だった。
- ・初めて会う方に、こんなに自分をわかってもらえるのだな。そして、初めて会う方に、自分はこんなに共感できるのだな。
- ・職種や校種が違う方に伝えようとする、その方たちにわかるように「かみ砕いて」話したり、「たとえて話す」ような自分が出てくるのだな。
- ・自分の営みや気持ちをこうしてまとめる、人に話す、感じたことをお聞きするってとても大切な機会だな。自分の輪郭が前よりはっきり見えた感じがする。そして、明日からまた、自分の仕事を大切に、がんばっていきたいと思える。

福井県の小学校教諭A先生は、子どもたちの活動を、自分の思い描く方向へ「引っ張ろう」としてしまいう自分自身に、何度も立ち止まり、時に待ち、時に子どもたちに問いかけながら、子どもたちと共に「健康運動づくり」に取り組んできたことを語られた。自分

も小・中の教師として、幾度となく同じ悩みを感じてきたので、その悩みに強く共感したことをお伝えすると共に、A先生の「問いかけることで、子ども自身が再度深く考えることを促す」在り方に学んだことをお伝えした。

石川県の私立高校のB先生は、学習への意欲の面で課題を感じる、クラスの2人の生徒さんの力になりたいと思い、面談を繰り返してきたことを語ってくださった。高校の先生が、自分のことのように自身の進路について共に考え、面談を繰り返してくださること、なんて幸せなことなんだろう、とお伝えし、さらに、小学校に比べ、中学校や高校では、評価がペーパーテストの点数に一元化されがちであることにあらためて気づき、そのことを話題にした。

うまく伝わるか心配だった、指導主事としての数年間を振り返った自分の発表を、同じグループの方々は、うなづきながら、親身になって聞いてくださった。そして、「そういうふうに寄り添って授業を見てもらえたら、がんばれるかも」「自分がしている教師ってすばらしい仕事なんだなって、あらためて思えた」と伝えてくださり、ものすごく力をいただいた。また、会の最後に大学生Cさんが、「やっぱり、先生になりたいと思いました」と笑顔で語られていた姿がとても印象的で、高校生・大学生も参加しているこの会の意義を感じた。

このように、「力をいただける」ラウンドテーブル、「ぜひまた参加したい」と感じています。こうした場を継続して設けてくださっている福井大学の皆様に、感謝申し上げます。ありがとうございました。



長期実践報告会感想

長期実践報告会を終えて

ミドルリーダー養成コース2年/町田市立武蔵岡中学校 内村 佐保莉

つい先日教職大学院に入学したばかりだと思っていましたが、気づけばもう修了がすぐそこまで迫っています。コロナ禍、それまでの学校生活を見直して新しい日常を作り出そうとしていた頃から、次第に終息の兆しが見え諸活動に自由さが戻りつつあるこの2年間を、教職大学院生として様々な学びを重ね、学校現場に還元できるよう取り組んできました。その歩みの一部を長期実践報告として書くことは、自身とじっくりと向き合いながらこれまでを振り返り、今後の活動の指針を得るとても貴重な機会になったと痛感しています。

長期実践報告では、第1部で現任校に所属するまでの自分を振り返り、第2部で研究主任として関わってきた校内研究のあゆみを綴り、第3部で大学院での学びを振り返りつつ今後の自分についてまとめました。1年目はこのような大作を書き上げることもなんてできないと思っていました。現に、集中講座でもなかなか筆が進まず、隣でスムーズに書き溜めていく仲間に焦りを感じていました。2年目の集中講座も同様になかなか書き進めることができず、冬の集中講座に入ってからやっと、文字にできるようになりました。メインは実践だったので集中講座では2部から書き始めました。始めはただ事実を羅列していただけだったと思います。しかし、書いては読み返し読んで書き直し…を繰り返していると、サテライトの先生方や院生、同じ学校の先生方や前任校の先生方など、実に多くの方の顔が浮かんできました。それは、私自身の実践に多くの先生方の関りと支えがあったことの証です。第2部を書くにあたっては主語が「私」ばかりにならないことを意識しました。

そして報告会では、同じグループの先生方に多くの先生方の関りをお伝えすることができました。

私は、教員になりたいくて教員免許を取得しましたが、小中学生の頃に抱いた「先生」のイメージが大きく、「先生は何でもできる人」「一人でできなければならない人」と思っていました。そして恥ずかしながら、この教職大学院へ入学し学ぼうと思ったきっかけもそのイメージからくる“不安”です。所属校での研究主任という役職に不安を感じ、「このままではいけない」「何もできない」と思ったことが一番の理由です。しかし、この長期実践報告を書くにあたり、集中講座で自分自身とじっくり向き合い、これまでの日々を教員になる前から振り返ってみると、実際は一人でもできることなどほとんどなく、周囲とのコミュニケーションと協働が常に存在していたということに気づくことができました。そしてこの長期実践報告を書くにあたっても、悩み苦しみながら共に書き上げた仲間がいます。一人でできなければならない、と思うと不安が募りますが、周囲には仲間がいます。頼っていいよと言ってくれます。これまで私自身を突き動かしてきたのは心の奥にあった“不安”ですが、そう気がついた今は、周囲との関りやつながりを大切にするために学びを止めたくないと思っています。

長期実践報告の最後には、「このような学びと成長ができたのは、すべての先生方や児童・生徒、保護者との「つながり」があつてこそ。協働できる仲間の存在に感謝しながら、これからも自身と向き合い前進していきたい。そして私もまた、誰かの支えになれるよう日々精進したい。」と書きました。教職大学院で

の学びと経験をこの2年で終わらせず、ここで得られた「つながり」を大切に学び続けたいと思っています。

長期実践報告会を終えて感じたこと

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学附属義務教育学校後期課程

揚原 佑

今回の長期実践報告会では院生生活3年間を通して学んできたことを他者に語った。

自分の今までしてきた挑戦、そしてその挑戦をすることで得た成果、そして挫折を他者に語ることに、自身の実践の省察になると共に、他の人から実践を価値付けして頂くことによって次の展望を描く機会になったと感じている。

そこで木村先生からは「他者から受けたアドバイスを自分のものにしようとする姿勢が素晴らしい、これからも忘れないようにして欲しい」と価値付けて頂いた。

この教職大学院では様々な機会実践を語り合う。自分達のような授業研究・教職専門性開発コースの場合、週間カンファレンスや月間カンファレンス、そしてラウンドテーブルなど様々なカリキュラムが設けられている。多種多様な他者と語り合うことにより重層的な省察を行っていく中で、自身の実践を再構築していく。そこで頂いた言葉一つひとつが自分にとっては財産であり、今後どうあるべきかを教えてくれる道標になったと感じている。

このような学ぶ機会を、今後は自分自身で作っていかねばならない。高い志をもった色々な方々と教育の在り方を語り合う、探究するコミュニティ作りをしていくことが重要になってくるのではないかと考えている。

自分一人で学校教育をしているわけではない、学校がチームとなって子どもを育成していくのだ。そのためにはやはりコミュニティ作りが核になると感じている。

長期実践報告をされた吉田先生も、鯖江高校で総合的な学習の時間の在り方を模索し、どんなカリキュラムならば子ども達の資質能力を高めるものになるのかを考え、実践されていったと語られていた。

最初の方こそ「鯖江高校の伝統を他所ものが変えようとするな」と煙たがられたが、段々と他の先生方も受け入れて下さるようになっていき、プリントを自主学习する時間から鯖江の街を自分達でPRするパンフレットを作るような活動を行うようになった。そしてその総合での学びが各教科にも波及していったという話をされていた。しかし吉田先生が他校に異動するとなった時にそこまで培われてきたものが持続するという事は難しかったようだ。

以上のような話から持続可能な探究するコミュニティをいかにして作っていくかが課題とお話しされていたことからその難しさが伺える。

コミュニティオブプラクティスにおいて「刺激と親近感を組み合わせることが重要」と書かれていた。つまり刺激が強すぎて負担感があるコミュニティは持続しないのだ。そこで自分と先輩とで継続している持続的なコミュニティの例を挙げたい。それはサウナコミュニティである。週1回サウナに行き、今週学校であったことを語り合うのである。サウナが

コーディネーター的な役割をもっており、肩肘張らずに気軽に向かえる、そんなデザインであるからこそ1年半近く持続出来ていると思う。だからと言って刺激が無く、実践を語り合わないとなると1人で行く方が気楽で良いやと自分の場合はなってしまう、それもまた持続的にはならない。

刺激と親近感の絶妙なバランスが持続的なコミュニティには必要不可欠であると身に染みて感じている。

自分なりに、そして負担感なく自身を成長させていく機会を持ち続け、挑戦し、常に学び続ける、そんな教師になりたいと長期実践報告会を通して感じることができた。

2年間の学びを振り返って

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高等学校 大橋 夕紀

この文章を書くにあたり、昨年度の長期実践報告会で聞き手として伺ったお話と、その時に考えていたことを振り返った。なんと！1年前には意図してなかったが本年度になって自分の中でテーマになってきているキーワードがあらこちらにちりばめられているではないか。これが2年間の福井大学教職大学院で学ばせていただいた「省察」の楽しさだと一人ワクワクした。その時その時の立場や環境で自分の中で注目されるワードは異なるが、振り返ってみると同じところに行きつく。長い実践としてのこれまでの歩みを、もう一度今の自分の視点から見ると、多くの気づきとこれから自分が向かうべき方向性が見えてくることがある。2月に行われた本校のSSH研究発表会に助言者として参加して下さった木村優先生が、生徒たちへのアドバイスとして「探究を進める中で躓いたときは一歩前に戻ってみるといい。そうすると次への手立てが見えてくることがある。」と言って下さった。これも正に私が2年間で学ばせていただいたことだと実感している。

長期実践報告会是对面で参加したいと思っていたが、どうしても日程的に難しくオンラインでの参加となった。しかし、そのおかげで同じく今年度実践報告を書き終えた沖縄県宮古島市の下地先生とオンラインで繋がることになった。オンラインだからこそこの出会いに感謝である。自分の報告では、自分の想い

を伝えたいという部分が緊張につながりなかなか順序良くお伝えすることができなかったが、聞き手の先生方がじっくり聞いてくださり質問を投げかけたりポイントを整理したりしてくださったので何とか一番伝えたいことをお伝えすることができた。寺田先生が、「若狭高校の探究はシステムが構築され上手く回っているイメージがある。これまで(教職大学院で学ばれた)先生方が探究科や海洋科などのある意味特殊な部分について記録を残してくださっていて、今回はより一般事例の部分の記録を残した印象がある。」と言って下さったことが何よりうれしかった。長期実践報告を書くにあたり、決して十分ではないが学校がより良くなるために自分がやってきたことや考えてきたことを残そうというのが自分の中のテーマの一つであった。2年前はそこに関係しているのは、教科「探究」だけだと思っていたが、2年間の学びの中で、「探究的に」自分が取り組んだり関わってきたりした諸々の出来事が関係しているのだということに気づくことができ、それを何とか文字に残したいという思いで最後までなんとか書くことができた。

自分の報告が終わり、下地先生のご報告を聞いた後に再度考えたこととしては、システムの構築が図られたとしても、システムの構築に関わった人たちの様々な思いをつなげていける環境がその場にない

れば進歩や成長につながらないということだ。この思いの部分を伝えられる一つの手段が長期実践報告を書くことなんだと今は理解している。思いをつないで成長するコミュニティを作る力は今後のどんな

場面においても求められ、自分でも伸ばしたいと思う資質である。来年度からの新たな舞台でもこれまでの学びを生かしていきたい。

私は、この上なく教職大学院生を楽しむことができた！

学校改革マネジメント2年/福井県敦賀市立沓見小学校 茅田 昌代

「私はこの上なく学校生活を楽しんでいる」この9年生の言葉に、私は衝撃を受けた。『福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち』（秋田喜代美×福井大学教育学部義務教育学校研究会 東洋館出版社 2018）「この上なく学校生活を楽しんでいる」ですって？！衝撃を受けながら、私は自分に問いかけた。「あなたはどうかこの上なく学校生活を楽しんでいる？」と。私の答えは「幼い頃からの夢を実現し、かわいい子どもたちと、すばらしい先生方との学校生活を楽しんでいるけど、“この上なく”ではない…かな…」ここから私の問いが生まれた。子どもたちも、先生方も、この上なく学校生活を楽しむための学校、つまり「誰もが居心地のよい学校づくり」をめざして奮闘する日々が始まったのだ。

「私にはまだ1年ある。」ちょうど1年前、先輩方の報告を聞きながら、そう思った。まだ他人事のように思えた。でも“その日”はあっという間にやってきてしまった。でも、不思議と焦りはなかった。自分がしてきたことだから。でも、過去の自分と対話することで後悔したり、落ち込んだりした。「実践はうまくいなくて当たり前」という教職大学院の先生の言葉が心の支えになった。うまくいかないことこそ、書き記しておくことの意義を感じた。

「私には見たいものがまだある！」報告を終え、そう思っている。書き終えたことが終着点ではなく、終着点にたどり着いたからこそ、また次にチャレンジしたいことが見えてきた。「人は学び続ける人からしか学べない」今回のクロスセッションでいただいた言葉である。

小学校2年生の国語の教材に『たんぽぽのちえ』という説明文がある。短くまとめると次のようになる。たんぽぽは、黄色い花を咲かせて2、3日経つと、しぼんで黒っぽい色に変わり、地面にぐったりと倒れてしまう。それは、枯れてしまったわけではなく、軸を静かに休ませて種にたくさんの栄養を送っているのだ。こうして、種をどんどん太らせ、晴れた日に遠くへとわた毛を飛ばす。たんぽぽは、こうしてあちらこちらに新しい仲間をどんどん増やしていく。こんな話である。

私は、今、まさに太らせた種を大事に抱え、遠くへ飛んでいこうとしているたんぽぽのわた毛ではないだろうか。よし、協働と対話をテーマに学校づくりをするぞ！と、心の中に咲いた希望の花を見つめながら始まった教職大学院の“女子大生”生活。しかし、すぐに次から次へとやってくる課題に大きな気持ちは意気消沈、一気にしぼんだ。軸は折れた、倒れた。しかし、私の心の花は枯れたわけではなかった。壁と戦いながら、行ったり戻ったりして、また花を咲かせるために種を太らせていたのである。このぐったりと倒れていた期間、私に種を太らせるための栄養をくれたり「倒れていてもいいんだよ。そういう時も大事だから。」と伴走してくれたり、よしっ、起き上がるぞ！と決めた時にパワーを貸してくれたりした仲間がいた。それは、カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座で出会った仲間だった。先輩の学校改革実践研究報告だった。先人の知恵がたっぷりつまった書籍だった。そして、見守り、支え、多様な視点を与えてくださった先生方だった。

現場で忙しく過ぎていく日々。私の悩みが大きくなるのに合わせたかのように、ちょうどカンファレンスがあった。そこで栄養をもらい、種を太らせることができた。出会いの中で成長できた自分を感じている。多くの方との出会いに、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。そして、福井大学附属義務教育学校9年生（当時）のきゅうさん（何度も心に刻んでいくうちに親しみがわき、私が勝手にこう呼んでいる）、あなたにも心から感謝している。あなたが「この上なく学校生活を楽しんでいる」気持ちが、今の私には分

かる。私も「この上なく学校生活を楽しんでいる」そう言える。私に衝撃と刺激をありがとう。おかげでこの上なく楽しい教職大学院時代（“女子大生”時代）になったことは間違いない。

さあ、わた毛よ、ともに行こう。この2年間の教職大学院での学びを広げるために。私とともにあちこちへ飛んでいく仲間と、新しい場所で、たくさんの花をさかせるために。

他者と自分のストーリーを照らし合わせる価値

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

加福 智哉

教職大学院に入学し、もうすぐで1年を終えようとしている。この1年間は長かったようであつという間だった。そして、非常に濃く、学びの多い1年でもあった。開講式から始まり、金曜カンファレンスや月間合同カンファレンス、ラウンドテーブルに集中講義、インターンさらに講師まで1年間でこんなにたくさんのことをやってきた。振り返ってみると、自分自身でも大変驚くほどである。こんなに忙しい1年は初めてくらいの経験だった。そんな1年の集大成として、今年度修了される先輩たちの長期実践報告会が行われた。

これまでに他者の実践を聞く機会は、金曜カンファレンスや合同カンファレンス、ラウンドテーブルなど多くあった。しかし、そこで聞く実践は断片的なものであった。そのため、実践を語る人の背景や経緯を知ることはなかなか難しいものであった。今年度行われた長期実践報告会は、今年度修了される方たちが書いた長期実践報告書をもとに語り合いを行った。そのため、報告者のストーリーを感じながら報告者の実践を聞くことができた。ここからは、長期実践報告会に参加して、学んだことを中心に書いていきたい。

私は今回聞き手として参加した。報告者として、2名の方がいらっしゃった。ストレートマスターの3年目を終えようとしている先輩と、実践豊富な先生の報告であつた。私には、経験がないようなお話もあり、とても新鮮なお話もあった。

ストレートマスターの方のお話は、私にとっても近いものがあつた。金曜カンファレンスの後に院生室でお話をする機会も多くあつたため、今その人が何に悩んでいるのかも少し知っている部分はあつた。しかし、私は、その人の足跡を全く知らなかった。その話はとても新鮮であつたとともに、とても参考になるお話だった。ストレートマスターの先輩は、専門は理科であつたが、M1の時は、特別支援学校でインターンを行っていた。特別支援学校では、児童に合う課題や授業を工夫しながら行っていたそう。私はその経験がとても教師としての資質・能力につながるのではないかと考えていた。今、個別最適化の学習が求められている中、特別支援学校での学びは、それそのものであり、今求められているものにぴったりと話を聞いて思うところであつた。私も講師をしていて、個人を見取りながら、授業をする難しさを感じていた。特別支援学校の話を知っていると、より

見取りの重要性を感じる瞬間でもあった。また、M2 M3になり、教科の実践が増えていく中で、M1時代の経験がとても軸になっていると感じた。私もM1をもうすぐ終えようとしているが、この1年間の学びの省察を行い、来年度へと生かしていかなければならないとより強く思うようになった。

報告者2人目の方の言葉で一番印象深いものがあった。それは「見通しを持つ」という言葉である。当たり前のことではあるのだが、1年講師を務めてみて、見通しを持ちながら授業をする大切さに気付かされたのである。授業をしていて、各学年で学ぶ内容であったり、来年度に学ぶ内容にどう生かしていくのかを考えながら授業づくりをしていく大切さに気付かされていた。また、附属義務教育学校前期課程で学ばせていただいて、9年間の見通しを持ちながら授業を行い、児童がどんな姿になっているのかをイメージしながら授業づくりをするようになっていった。そ

のような経験もあり、「見通しを持つ」という言葉は私の心に刺さり、やはり、重要なものであると再確認できたのである。

今回の長期実践報告会では、2人の実践を聞き、自分と重ねながら、学びを広げることができた。そのため、もっと多くの人の実践を聞いてみたいという思いも持った。人それぞれストーリーがあり、経験してきたものは近いものがあるかもしれないが、必ずそこに行きついた経緯は異なっているだろう。その経験に行きついた多くの経緯を知り、自分と重ね合いながら、自分がその場面に出くわした時、なにか思い出す材料になると自分にとって大きな価値になると考える。

この長期実践報告会で学んだことや、感じたことを大事にしながら、来年度の実践また、長期実践報告書へ生かしていきたい。

人生について振り返る

授業研究・教職専門性開発コース1年/丸岡南中学校 多田 朋生

2月5日に長期実践報告書の報告会があった。自分は院生の高島さんと、内田先生の報告を聞いた。高島さんの報告ではこれまでに高島さんがどのような人生を歩んできたのか、人生の中でどのような心境の変化があったのか、大学院生活の中で何を大切にしてきたのかということを聞いた。内田先生の報告では、内田先生が仕事の中で考えてきたこと、今務めている職場での取り組みについての報告があった。報告を聞いて感じたことをまとめていく。

高島さん、内田先生の報告で私が感じたことは、自分自身を振り返ることの大切さである。高島さんが小学校のころから大学院を修了する今まで自分がどのような人間であったのか、内田先生がこれまでの職場での取り組みを語る中で、自然と私自身も自分のこれまでの人生について振り返っていた。小学校のころから大学院に在籍している今までを思い出す

と、昔の自分の方が今の自分よりも頑張っていたのではないかと思ってしまう。小学校・中学校の頃は何か目標があれば絶対にやり切る、達成するというエネルギーにあふれた子どもだった。誰かのために何かをしたいという気持ちもあり、人に優しくすることもできていた。しかし、高校・大学の時の自分を振り返ってみると、だんだんとあらゆることに対する熱が冷めていったように感じている。こうして大学院に來た今も、1年経ってみて、何もしていないのではないか、何も自分に身についていないのではないかと不安になる日々であり、何となく毎日を過ごしていたのだなあというように感じる。大学院での1年間を振り返ってみると、この大学院に在籍されている先生方の教育への熱意がとてもすごいということを感じる。どの先生方も明確な目的と信念を持って、実践をされていた。自分の事を振り返ってみると、何

か明確な信念があるわけでもなく、熱意もない。大学院に来て何を言っているのかと思われてしまうだろう。しかし、今回の報告会は改めて自分が教育について何をしたいのか考え直すという機会になったと感じている。報告会の後にこれから何をしていきたいの考えると、まずはいろいろな人と話してみたいと考えるようになった。この一年間、カンファレンス以外で、あまり人と関わらない生活をしていたと感じる。院生の仲間達についても、まだまだ知らないことが多い。教育に対する熱意、信念とは少しずれるか

もしれないが、私は大学院の最後の一年間、いろいろな人と話してみたいと思うようになった。今回の報告会で報告者の人生について知ることができたことで、私の人生についての振り返り、考えを深めることができた。これは教育にも通じるものがあると思う。生徒のことを知らなければ、授業を進めていくこともできない。また普段の学級運営にも関わってくる。将来自分が教員になった時に、大学院で人と関わってよかったと思うことができるようにこの一年間過ごしていきたいと思う。

理念を軸に編み上げられた独自のストーリーを追体験する

ミドルリーダー養成コース1年/晃華学園中学校高等学校 千葉 美奈子

今回の長期実践報告会では、岐阜聖徳学園附属中学校の岩瀬夢有人先生と戸田市立戸田中学校の藤田政貴先生のお二方の報告を伺った。報告を聞いて、私は、先生方の想いを背景にした大きなストーリーを追体験することができた。冊子で読む実践報告書とは違い、それぞれの先生が大切にしていることを軸とし、実践がどのように変遷していったのかをより明確に理解することができた。

岩瀬先生の報告では、体育の教師としてバレーボールの授業を「楽しみ」をもって取り組んでほしいという願いのもと、実践を積み重ねていく様子を伺った。岩瀬先生は、授業が教師主体から生徒主体へ変化したことを目の前の生徒の行動の変容から実感したそう。特に印象に残ったのは、休憩中にも生徒たちが自ら上達するために練習に取り組むようになった出来事だった。先生が、「生徒が主体的に動くようになった」と実感した瞬間だったそう。生徒が自ら学びに向かうこの変容こそ、先生がずっと望んでいたことだったので、その話を聞いたときは私もとても嬉しく思った。

また、岩瀬先生は、生徒になぜこのような変容が起こったのかを授業外での「対話」を大切にし、信頼関係を築いてきたからだと話されていた。授業内だけでは関係性を築くには難しいので、休み時間や部活などのタイミングで自ら話かけ、関係を作る努力をされてきたそう。4月から着任した現任校で、私は生徒との関係性が築けず、授業もうまくいかないう状況が4月から続いていたが、やっと今年になって、生徒と授業を作り上げていけるようになった。こんなに時間がかかってしまったのは、おそらく、生徒との関係性を築く努力を自分が怠っていたからだ実感していたので、先生の言葉はとても説得力があり、改めて今年の自分を振り返る大切な機会となった。

藤田先生は昨年2月のラウンドテーブルにて、1年目の実践を伺っていたので、2年目に入られ、先生の実践がどのように進展してきたのかを伺うことができた貴重な経験となった。先生が不登校児への取り組みを学校の枠を超えて専門機関や行政と連携を取りながら進められてきた話を伺っていた昨年の実践の規模がさらに拡大していることに先生の周りを

巻き込む力と勢いに圧倒された。藤田先生がこのような実践ができたのは、教師、管理職、行政の働き手など様々な立場で常に柔軟性を持って状況判断し、課題を解決してきた経験と常にある現場を良い方向に導きたいという強い願いから成るのだろうと感じた。とても大変なことなので、体や心に負担があるように感じると普通は思うが、そうではなく、先が見えるからこそ困難も楽しめているように見えた。自分はずいぶん、殻に閉じこもりがちで、問題を自分で抱え込むこともある。しかし、先生は「人が好き、教育を楽しむ」というスタンスを貫かれている。「自分は哲学がないと思ったので、哲学者リヒテンシュタインの哲学を取り入れた」というエピソードからもわかるように、自分にはないものは取り入れればよいとい

う考え方も先生の「しなやか」な実践につながっているのだろう。

お二方の2年間の実践の中には、常にそれぞれの「願い・想い」が軸となり、実践が紡がれていた。大変なことやうまくいかなかったことも良かったこと・成果と共に一緒に語られていて、当たり前のことかもしれないが、それが一体となってさらなる展開を迎え、現在に至っていることがわかった。感情が一喜一憂することが多い私だが、もう少し肩の力を抜いて粘り強く実践を続けようと思った。「対話」「人を巻き込む力」を意識しながらこれからの実践に取り組んでいきたい。

長期実践報告会を振り返る

ミドルリーダー養成コース1年/認定こども園 福井俊成幼稚園 荒 通雄

長期実践報告会にて、教師になった動機や葛藤、そして重ねてきた努力などが語られた。報告を聞きながら私自身もこれまでに振り返ることが出来る良い機会となった。

以前の職場は、男性保育士が私を含め4名であった。先輩たちは、保育の考え方や取り組み方がユニークであり、「こんな保育士になりたい」と憧れを持った。一緒にクラスを任せられ、先輩の背中を見て育った私は周りから「〇〇先生に似てきたね!」と言われることが増え、嬉しかった。

しかし、子どもたちとの距離感が掴めず、「〇〇先生がいい」「〇〇先生はこう言っていたよ」といわれ、自分の存在が感じられなくなった。そんな不安を周囲の先生に相談した。そこで分かったのが「自分の保育をしていない」ことであった。今、思うと、あまりにも憧れを強く持ち過ぎて、形ばかりの真似をしていたのだと思う。自分の保育に自信が持てなかったのかもしれない。子どもは可愛くて好きだが、「好き」だけでは仕事ができないことをあらためて感じ、「保

育の基本+相手の優れた特徴+自分らしさ」を身につけてこそ、自分のものになり、保育として、仕事としてつながっていくのだと理解した。そのために私は、多くの保育に関する本を読み、他の先生の保育観を聞いた。研修にもたびたび参加した。意気込みを見せ一番前の席に座って講義を聞いた。

ところが、様々なことを行っても保育に対する自信が湧いてこない、不安になる一方であった。そんな時、用務員の先生に話を聞いてもらった。その先生は、仕事を通して多くの資格を取得しており、「資格は強みに変わる」と教えてもらった。その言葉に私は「これだ」と感じた。さらに、仕事に対して不安を抱いていた私に父がカウンセリングの勉強をすすめてくれた。カウンセリングの聴き方、見方等は、子どもとふれる時も保護者との対応にも有意義であり、学びが進めばカウンセラーの資格も得ることが出来るとのことであった。

そこで、私は、第一歩を踏み出した。3年間、グループワークや講義、レポート提出などかなりハード

であった。しかし、一緒に学ぶ仲間にも恵まれて、資格も取ることが出来た。何よりも勉強をすることの楽しさが出てきた。学びの中で「どんな自分でも認めていく」という「自己肯定」が特に自分の力となった。同時に保育の知識を学ぶことの楽しさも重なり、保育を自分のものに行っている実感が湧いてきた。「好き」だけで始まった仕事ではあったが、次第に、子どもたち、周囲の先生たちや親の存在の大きさを感じた。

今の職場は一人担任制であるため初めの一年は元に戻ったかのように自信を消失していく自分がいた。ここでは「新人なのだ」という自分を認めつつも、どうして思うようにできないのかと追い詰めていく自分もいた。しかし、子どもたちは、そんな私を助けてくれた。先生たちも同様に助けてくれた。支えられ、

励まされ、子どもたちと一緒に成長していくような実感を得た。そこで、このように「迷いながらの自分でもいいのだ」と感じ、「自分の足りない部分は、子どもたちや先生たちに足してもらえばいいのではないか」と思えるようになった。再び「保育は楽しい」と感じ、同時に自分自身の成長も感じられるようになった。

今後とも困難や不安になることがあるだろう。しかし、これまで経験したことを支えに乗り越えていきたい、共に学んでいきたい。そして、私自身も周囲の人を支えていけるような保育士、教育者になりたい。報告会に参加したことで自分自身を振り返り、今後の願いも確認が出来た自分であった。

長期実践報告を振り返る

学校改革マネジメントコース 1 年/東京栄養食糧専門学校 金澤 敏文

思い返してみると、教職大学院に入学した 4 月は「これから何を学ぶのだろうか」という期待と、「私の能力で本当に大丈夫なのだろうか」と不安を持っていた。日常業務と並行しながら果たして学びは深まるのか、時間的な余裕はあるのか、思考の整理が追いつくのか…。しかし、カンファレンスやラウンドを繰り返し先生方からご助言をいただきながらリズムカルに省察と実践を行き来する心地よさを感じ始めている。東京サテライトでは共感し合うことの大切さを学び、学校種の垣根を越えて語り深め合うコミュニティが形成されている。オンラインによる学びでは、さらに多くの先生方の実践と地域の特色、風土に触れることができ柔軟な思考に興じる機会をいただいている。何より、実践を行う同士に囲まれることで、共に悩み、考え、伴走することの大切さに気付くことができた。

2022 年度の長期実践報告会に参加して、2 名の先生方の長期実践報告を傾聴した。授業改善の実践では、平面的な授業展開でなく、言語が持つ意味の本質

について捉えることができた。その内容は中学生が親しみやすく工夫されたおり、英語を学ぶというよりは声に出して楽しく理解することの大切さを学べる実践報告であった。

また、教職員のベクトルを揃える実践報告については、校内研究授業を取り仕切る難しさと、理論的にコミュニティを形成する一連のプロセスについて学ぶことができた。「主体性を持つ必要があるのは教員側である。」とおっしゃっていたが、その通りであると共感した。どちらの報告も実践の理論に基づいていたものであり単純な私見によるものでなかった。また、一連の展開にはそれに関わる省察・検討の軌跡が描かれており、自身の 1 年間を重ねてみると見えてくる課題も多くあるように思えた。

日常に話を移すと、学校で取り組んでいる実践の本筋からこぼれた言葉、行動、思考を軽視していたように思えた。普段のしゃべり合いや表情の中にこそ、実は大事な問題が含まれており蔑ろにできない。何

やら勿体ないことをしたな、という思いである。これからは組織全体を形骸化させないために小さな活動が生まれやすい土壌を整えたい。それで発生した小さいアイデアや前向きな思考を陰で育み、やがて大

きなうねりとなって学校全体を動かすように、そして学校・学生が幸福になるように舵取りをしたいと考えている。

大学院での学びを振り返って

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/附属特別支援学校 加藤 もも香

今年度、私は「子どもに寄り添う」というタイトルで長期実践研究報告書を執筆した。教職大学院に入学し、初めて先輩方の長期実践研究報告書を読んだときには、私にこんな報告書が書けるのだろうか、とても不安に思ったのを覚えている。どの報告書を読んでも、そこには、それぞれの先輩方のこれまでの実践が細かく書かれていた。先輩方が子どもたち一人一人と向き合い、関わっていった記録や、実践した授業の記録が、報告書を読むことでとても詳しく伝わってきた。大学の看護学科を卒業し、教職大学院で教員免許を取得することになっていた私は、先輩方のように授業を行ったり、子どもたちと関わったりしていける自信がなかった。

報告書を執筆する前の合同カンファレンスで、報告書の方向性や構成について話し合う機会があった。そのとき私は、インターンシップでの実践や、子どもたちとの関わりについて主に書いていこう、というざっくりとした方向性は考えていたが、構成を考えたときに、それらがストーリーとして繋がっていくかどうか不安であった。

実際に報告書を書いていくにあたって、まずは、自分が教職大学院でのインターンシップで行ってきた実践や、そこで出会った子どもたちとの関わりを書きだしていった。ストーリーとして繋がっているのかどうかわからなかった私の一つ一つの実践が、振り返り、捉えなおしていく過程を通して、繋がっているものであったということに気付くことができた。

それぞれの実践や子どもたちとの関わりについて、改めて振り返るなかで、当時抱いていたものとは違う思いや考えを抱くこともあった。今の自分なら、もっと違うような関わり方をしたかもしれないな、と思うようなこともあった。1 年目や 2 年目にうまくいかなかったことや改善すべきことが、3 年目の実践では意識することができていたなど、改めて 1 年目から振り返ったことで気付けたことがたくさんあった。報告書を書くためではあったが、自分の実践を振り返り、もう一度考え直すことで、3 年間のインターンシップでの学びをより深いものにすることができたと感じている。

今までの自分なら、以前の自分が行ってきたことを振り返って、あのときどう思っていただろう、今の自分は思うだろう、と考えることはほとんどなかった。今回、私が教職大学院に入学したきっかけを含め、さまざまなことを振り返り、改めて考え直すことができ、それによって、初心に立ち返ることができたり、新しい視点を得ることができたりした。これからも、何か実践して終わりではなく、振り返り、捉えなおしながら進んでいきたい。

最後になりますが、3 年間の学びを支えてくださった教職大学院の先生方、カンファレンス等で交流があった先生方、ストレートマスターの院生の皆様には、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

長期実践研究報告会

～充実した深みのある時間を過ごす～

学校改革マネジメントコース1年／品川区立東海中学校 黒田 佳昌

1月の冬期集中講座、東京サテライトでは、長期実践研究報告書の原稿〆切を月末に控えて、焦りと緊張感を漂わせていたM2の先生方の姿がそこにはあった。M1である私は、来年は自分もその立場になるのかと思いつつ他人ごとのように見ている自分がいた。それから1か月、2月5日にオンラインで「長期実践研究報告会」が開催された。

開催に先立ち、研究科長の柳沢先生からは「自分の実践の省察と構想は密接に連動している。自分の実践をどのように捉え返して、これからをどのように考えるか。カリキュラムを展開し、新しい学校の雰囲気をつくっていくことは、自身の今までの長い展開をある程度考え試行錯誤していかなければならない。教職大学院はその力をつけるために始まった。そして長期実践研究報告を書くということは、より長い展開を吟味し直すことである。それを院生同士がカンファレンスを通して協働で吟味していく取組を重ねることが、お互いの力を培っていく大切なサイクルとなる。」というお話があった。

私のグループでは、沖縄県多良間村立多良間中学校の上里公人先生と福井県敦賀市立東浦小中学校の堀川和宏先生のお二人の発表を傾聴した。

上里先生は、東京サテライトの仲間でありカンファレンスや宮古島ラウンドテーブルでお話したこともあったのだが、今回報告を聞いてカンファレンスでは見えなかった上里先生の人柄や実践、苦勞されたことがよく伝わり、グループのメンバー全員の学びにつながった。上里先生は中高数学科の免許を所持していた。4月の始業式前日、教育事務所から地元小学校の採用連絡が入る。突然小学校の担任となるが、授業の進め方や指導の仕方がわからず。自分の授業を人に見てもらい指導してもらいたい、人の授業を見てみたい、という思いが叶わず、突然契約終了

期間前に解雇される。次の工業高校実験助手のときには、いろいろな先生の授業を見させてもらう。また生徒とかかわりの中で、中学校時代の不満や傷ついてきたことを知ることとなり、中学校の教師になってそのような子どもたちの手助けができないかと思うようになる。採用試験を経て中学校の教師となり授業研究に力を注ぐ。授業を改善することで生徒の表情がよくなり、授業を楽しそうに受ける生徒の姿が見られるようになる。また学校内に問題行動の見られる生徒がいたが、なんとなく学校全体で授業から排除する雰囲気が強かった。生徒との対話を通して、このような対応が大人不信につながっていることを理解する。ほっとかれている生徒は勉強からますます遠のき、友達関係もなくなりトラブルが増えるようになる。しかし子どもたちは、本当は勉強がわかるようになりたいという気持ちがあることがわかる。上里先生が生徒とのかかわりを増やして勉強を教えることで、授業も落ち着いて受けるようになっていく。その時、問題行動を起こしている生徒は、「困った子ではなく、困っている子」であることに確信をもつ。そして問題行動の子だけでなく、教室で座っているけれど勉強ができない子にも目を向けて、数学のテストを工夫してできない子でも20点、上位の子どもがつまらなくならないように難しい問題も20、30点入れたテストを作ったことで、生徒の授業への参加意欲が増すようになった。その後2年生の担任になる。1年生の担任時は1つ1つ教え込み、どちらかと言うと締め付けるような指導をしていたが、ここでは初めて生徒に任せる時間を増やし、集団で取り組むことの楽しさを指導するように変えた。生徒に任せてみて、生徒同士が思いやり、協力するようになった。また何か問題があったときに全員がどうしたら解決できるか真剣に考えるようになり、生徒に任せる大切さに気付く。次の学校では、村がはじめ

た取組「プロジェクトT」で、地域のよさと改善点を地域住民と生徒が見つけて、どうしたらよいか考える。そしてそのアイデアを子ども議会で村長、教育長、各部課長に提案する。提案によっては実現に向けて、観光課で取り上げられ、イベントや商品開発につながっている。生徒が大人とのかかわりを通して自信を持ち、自己有用感を高めることができてきている。

授業を大切にしている、授業を通してどの子も伸ばしてあげたいという姿勢に心を打たれた。また家庭環境や人間関係、学習の遅れなどの要因で学校生活につまづいている生徒たちに常に寄り添っていること、学校内に教育的な効果の高い地域人材を積極的に活用して、生徒に還元していること、校内でよりよい同僚性を構築することを大事にして、自分から積極的に同僚性や協働を実践していることが素晴らしいと感じた。

二人目の発表者である堀川先生は、長く中学校での教職経験を積み、現在は小規模特例校小中学校の小学校教頭をされている。堀川先生は、採用後に中学校担任として、若さや経験不足から失敗を繰り返したが生徒や保護者、そして先輩たちに助けられてきたという経験がある。3年目に小規模中学校3校の技術科教師として兼務していく中で、教科指導や部活動で同僚にアドバイスや支援してもらいながら様々な経験を積んでいかれる。しかし次の母校へ異動となって、担任として受け持った学級の生徒が落ち着かず、常に叱ってばかりいる自分が嫌で自己嫌悪に陥り翌年副担任を希望する。次の異動では、市内で一番大きな中学校に転勤した。改めて担任として、以前に担任を外れた、逃げたという思いから絶対に最後まであきらめないで生徒に関わっていこう、生徒を見捨てないという強い思いでやってこられた。卒業時に生徒のメッセージから、自分が生徒を叱ってばかりだったことを振り返り、自分を変えなければいけないと思う。野球部顧問の研修仲間からのアドバイス、高速道で見た心に響いた看板広告「仕事とは人様を幸せにするべきものでなくてはならない」など、この時期、苦労も多かったがあきらめず、粘り強く生徒や保護者と関係を築いていった。その後、学

年主任になりどのようにやっていけばよいかかわらず、学年教員の意見ばかり求めていたところ、校長から学年主任として自分の考えをきちんと示すよう指導される。それからはずぐに意見を求めるのではなく、まず自分の考えを学年教員にきちんと示すように心掛けた。そして学年教員の理解のもと、生徒の思いや意見を取り入れた学校行事をやり遂げる。教務主任としては、コロナ感染症対応に振り回されながら、働き方改革を進めるための学校評価のシンプル化を図ってきた。現在、小中合わせて児童生徒数27人という小規模特例制度の小中学校で小・教頭として、体験重視の教育活動を進めるために、様々な活動講師を招聘し、小規模校同士で体験学習としてミカン狩り、総合学習でミカンについての発表をし合うなど、児童にとって充実した取組を行っている。そしてみかんプロジェクトとして、地元農業の課題を踏まえて中学生の取組を発展させている。教頭として小中の体験学習のカリキュラム再編に取り組む。そして小規模特例校の一番の課題である児童生徒数の確保のため、管理職3人が地域に出て行き学校の説明をし、毎日HPを更新するなど、経営努力をしてきた。堀川先生は、今、この学校を選択してくれた子どもたちが、楽しく、いきいきとしている姿を見て、自分が考えてきた学校というのは、このような学校なのではと強く思っている。

上里先生と堀川先生の長期実践研究報告をじっくり傾聴させていただいた。他者の長い実践に基づく話を聞くということは、自分自身の経験と重ね合わせて聞くことができる。時に深く反省したり、時には共感したり、また自分だったらどうするだろうかと考えさせられたり、新たな発見をさせてもらったり、とても充実した深みのある時間であった。教育という仕事に就いて38年目になる。学校教育は、校種や学校、地域性、時代の流れなど、様々なことが関連している。いつの時代も子どもたちのことを真剣に考え、幸せを願って子どもに寄り添い、粘り強く、自分を振り返ることのできる教師が学校コミュニティのコアとなると思う。校長という立場からこのような人材を一人でも多く育成していきたい。

長期実践研究報告会を終えて、1年間を振り返る

学校改革マネジメントコース1年／岐阜市立草潤中学校 中今 純一

「長期実践報告書を書き終えることができているのか」「1年後の報告会で語れる実践を積み重ねることができているのか」。今年度修了される先生方の、説得力のある語りに裏付けられた素晴らしい実践を聞かせていただき、1年後の自分を想像すると不安になりました。それと同時に、「自分も頑張らなければ！」と多くの刺激とエネルギーをもらいました。

若狭高校の大橋先生のご実践では、普通科に探究の授業を取り入れるために、さまざまな試みをされる中で、常に職員間の連携を図っていました。細かなことでも情報共有することを大切にされており、対話の時間も設けていました。私自身、慣れや多忙さを理由にして、職員との対話を疎かにしていた時期があったことを思い出すとともに、改めて職員との対話を大切にしていきたいと思いました。

狩俣小学校の下地先生のご実践では、子どもたちが地域のよさを感じ、地域とつながるために、さまざまな取組をされていました。先生ご自身が地域に歩み寄ることで、地域の方の支援の輪が広がり、子どもたちに還元されていく営みこそが、コミュニティスクールの理想形だと感じました。私の勤務校も地域の方々にたくさん支えていただいています。そんな地域の方々と子どもたちがつながる場を増やしていきたいと思いました。

今年度を振り返ってみると、学びが多い1年間でした。20年ほどの教員生活を振り返っても、今年度が一番学びの多かった一年と言えるくらいです。

その理由の1つは、不登校特例校で勤務していることです。本校は「学校らしくない学校」をつくるために、一般校とは正反対のことをやっています。生徒が学校に合わせるのではなく、学校が生徒に合わせることもその一つです。開校して2年が経とうとしていますが、私を含めた全職員は一般校で勤めていたこともあり、これまでと同じようなことをやろうとすることがあります。その時は、職員同士で「それ

は普通の学校っぽいなー」と会話をします。一般校とは正反対の学校に勤めていることで、新たな教育観や子ども観がどんどんアップデートされていきます。これまで当たり前のように学校にあったもの、行ってきたものを、常にゼロベースで見直しつつ、失敗を繰り返しながら試行錯誤の連続ですが、来年度も、子どもたちへの支援の在り方を追求していきたいと思っています。

2つ目の理由は、教職大学院での学びです。4月に入学してから夏頃までは、対話中心の学び方に疑問をもっていました。カンファレンスに参加しても、「ただ対話をしているだけで、自分にとって何の学びになるのだろう」と思っていました。岐阜県の教員研修は講義形式が多く、対話中心の学び方はほとんど行われていません。講義形式が当たり前だと思っていた私には、対話中心の学び方がしっくりときませんでした。

そのなかで、6月のラウンドテーブルでは、小浜第二中学校の加福先生の対話を校内研修に取り入れられたご実践を聞かせていただきました。職員間の対話によって、学校が変わっていくことがリアルに伝わってきました。また、夏季集中講座で読んだ『学校づくりの記』に書かれていた、さまざまな課題に立ち向かう校長先生の取組には、必ずといっていいほど『対話』がありました。教師、子ども、保護者、地域と対話を重ねながら課題を解決していく校長先生の姿に心が動かされました。そして、これまでしっくりとこなかったカンファレンスと加福先生のご実践と『学校づくりの記』が一本の線でつながった瞬間でもありました。夏休み以降に早速、本校もラウンドテーブルを取り入れました。職員の評判も上々で、今後、改善を重ねながら進めていきたいと考えています。

1年後の長期実践研究報告会では、自分の実践について自信をもって語ることができるように、同僚

や子どもたちとともに、「学校らしくない学校」をつくっていきたいと思います。

Schedule

4/2 **Sun.** 開講式

4/22, 23 **Sat., Sun.** 月間カンファレンス **A** 日程

4/29, 30 **Sat., Sun.** 月間カンファレンス **B** 日程

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】 いよいよ今年度最後のニュースレターとなりました。一年間大変お世話になりました。お忙しい中、皆さんにいつも素敵な内容を寄せていただき、ありがとうございました。ニュースレターを通して一つでも役にたつことを提供できたら、嬉しく思っております。お互いの学びや振り返りや感想に触れる手段になっているこのニュースレターは皆さんにとっても貴重な学びの場になるよう引き続き活躍していきと思います。
桜を迎える時期となりました。お花見を楽しみながら、素敵な春休みをお過ごしください。
来年度も引き続きよろしくお願い致します。（Y）

教職大学院 Newsletter **No.168**

2023.4.7 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp
